

# 幼児の教育

第六十二卷

第五号

幼児を 交通事故から 守りましょう



5

日本幼稚園協会

# — 新 刊 図 書 —

## あたらしい**幼児体育教材集**

駒沢大学教授 琴 かずえ著

(下記三巻の美しい箱入完成) ￥820

### ① こどものための **楽しい童話ゲーム** (￥250)

童話から発展させたおもしろい体育ゲーム

### ② こどものための **楽しい童謡ゲーム** (￥270)

童謡に連結された活発な体育ゲーム

### ③ こどものための **楽しい団らんゲーム** (￥300)

おとなとこどもが一緒にやれる集団ゲーム

○保育界の諸先生が推せんする、新しい体育理論と着想によった侍望のゲームあそび集。

○諸外国の幼児ゲームを多年研究し、これを消化創作した、唯一の書。

○本書により明日の保育に健かな成長が約束される。

(内容見本御申込み下さい) 〔分売可〕 日常の保育に、運動会に。

東京都目黒区  
下目黒3-507

**白眉学芸社**

TEL 東京 491-3380  
振替・東京 82474

## 新刊 保育図書

幼稚園教育指導書

## 自然編指導の実践

幼稚園教育指導書「自然編」の執筆者が具体例をひいて、直接その足りないところを補い、くわしく解説した実践のための手引書。

実践に役立つように参考資料も付けてあります。

大島文義 他共著

A5判 二九二頁

定価三七〇円 千七〇円

幼児に正しい交通教育を！

## 子どものための**交通安全指導書**

斎藤敏夫 他共著

A5判 八〇頁

定価百二〇円 千二〇円

フレールベル館 発行





## 幼児の教育 目次

——第六十二卷 五月号——

表紙 初山 滋

子どもの差違と教育……………牛島 義友(2)

\* 二、三才児保育への希望……………角 尾 稔(6)

\* 三才児保育の重要なこと……………南 信 子(10)

\* 四才児と五才児の保育上の相違……………永 山 昉 美(14)

\* 五才児の保育——子どもたちの話し合い……………石 井 達 子(18)

アメリカの幼稚園教育など……………斎 藤 敏 大(22)

おはなしをつくる子どもたち……………(27)

☆ 幼稚園は何をするところか④……………津 守 真(34)

\* じしゃくあそび……………清水エミ子(39)

四十年の歩み……………浅 野 友 美 子(53)

今年の雪と幼児……………武 鎧 秀 子(56)

島根県の幼児教育……………舟 木 哲 朗(58)



## 子どもの差違と教育

牛 島 義 友

同じ四月に入園したり入学してくる子どもたちも、その生れ月によって、身心の発育状態が非常に相違するのはあらためていうまでもない。

この年令での六か月のちがいは、中学生の一年の相違に相当する。このようなちがいは結局、生れてから後の月令がちがうのであるから当然であり、またやむをえないことである。なお、年少幼児の場合はただ月令が問題だけでなく、生れた月すら、身心の発達に影響する。例えば、早春に生れた子どもは、わりに発育はいいが、夏期に生れた子どもの発育はすこしはおくれる。これは身体運動が活ばつになる六、七か月の乳児の時に、前者は、うす着で自由に運動ができるが、夏生れの子どもは、ちょうどこの頃に着物でいくえに

も、まきくるまれるために、自由な運動が阻害される、それが発育に影響する。

もっともこの点からいえば、月令のすくない、はや生れの子どもに発育を促進さし、おそ生れの子どもの発育を、多少よくせいしているのので、両者の差をいくらかちぢめることになるかもしれない。

この早生れと遅生れの子どもの間に発育の差があることは事実である。しかし、これを教育の面から考えた場合は、ただその差を強調し、できれば生れ月によって組わけをした方がよいか否かという問題になるとそう急な結論は下しかねる。

多くの小学校では、早生れ、おそ生れを考慮して新入生の組分けをしているようである。また、イギリスでは、小学校



の入学を一年の内の一つの時に定めず、年に数回入学の機会をこしらえている。これはただ月令だけによって分けるのではなく、子どもの個人差を考慮して適当な時期に入学させるのである。

できるだけ一クラスの生徒たちの能力をそろえたいと思うのは、主として、教える者の側からの要求である。学力がちがう場合に教えにくいのは確かである。しかし、能力のちがいだけからいえば早生れ、おそ生れのちがいよりも、個人差の方がよっぽど大きい。生活歴の点からいえば、せいぜい一か年のひらきがあるだけである。しかし精神年令の点からいえば、幼稚園児でも、三、四年のひらきがある。五才で入園してくるもののなかに、少し発育の弱い子どもは、精神年令が四才に達しない者もいるのに対し、七、八才の子どもに相応するような子どもも少なくない。したがって、もし能力別編成をするというならば、生活歴で分けるよりはむしろ知能検査などの結果によって分けた方が賢明である。

しかし、このように園児や生徒たちの能力をそろえることに努力する前に、幼稚園や学校の本来の使命を考えなければならぬことである。幼稚園は家庭の延長であり、家庭的な要素を多分に保持しているのがぞましいといえる。また理

想的な学校は、社会の縮図であり社会に近似した場面においてのみ、よい社会人が育成される。

われわれの家庭の中には、双子の場合を除いては、等質的な家族は存在しない。生産力のゆたかな父親や、全然生産能力が欠けるのみならず生活能力さえよい乳幼児も、一つの家庭の中にいて生活している。ここでは能力に応じた役割のちがいが重要な要素となって一家がまとまった生活をなしている。

社会や職場でも同様である。同じような能力がかたまっているのは、巨大な事業場における特殊な職場ぐらいである。若い作業員を集めて電気製品を組み立てる工場などには、同じような年令能力の人がたくさんいる。しかし多くの職場には、男女、年令、学歴のそれぞれちがった人々がたがいに役割を異にし、おぎないながら生産活動をしている。ここで必要なことは、それぞれの能力経験に応じて役割が付与されることであり、その役割をみなが忠実に守ることである。

このような家庭や社会のことを考えると、等質的な学習集団は、むしろ非常にかわった別世界である。ここでいかに教育されても、その人が家庭にかえり、職場に入っても、よい家庭人であり、よい社会人になる保障は得られない。家庭の

ような、あるいは社会のような学校においてこそよい社会人は育成される。

等質的な集団においては教師と生徒との関係は、割に単純である。全生徒を、せいに先生の思う方向にひきずることもできよう。しかし、生徒自身の中での社会づくりや集団関係は、かえってむづかしくなる。協力的なもののよりも相互の競争と排他的な傾向になりやすい。

これは少し不適当な例かもしれないが、私たちの精薄者のコロニーで経験したことである。S君は精神年令がまだ三才に達しないが年令も七才ぐらいであるので、皆からかわいがられマスコットのようになされているお子さんである。一人で遊ばせているかぎり何も問題はない。ところが、この子がY先生の四つになる坊ちゃんと出会うと、どうもぐあいが悪い。S君にとっては、この坊ちゃんが自分と能力の接近したものと感じるらしく、がぜん、競争的となり、三輪車をうばいあったり、はげしいけんかをはじめ。相手の髪をむしり、顔をきずつけるようなはげしいけんかで、おとながとめてもすきをみては、かかっていこうとする。

このような例は子どもに接する人の常に経験することである。兄弟げんかにしても年令の接近したものにおこりやす

いのであって、年令が広くはなれたり性を異にした場合はけんかよりもむしろ、むつまじい間がらになる。学校の学習の場合においても、学力の接近したもののほど競争的になる。表面では仲よくしていても内心、相手をけおとしてやりたいという闘志にかりたてられている。今日、戦後に急増した子どもたちが高校入試をめぐるのはげしい競争や相互の中傷で性格がゆがめられていることは、しばしば指摘されていることである。等質集団は性格形成に必ずしも望ましいものではない。

異質集団ではむしろ、強いものの頭のよいものが上になり、他がそのけらいとなるような関係ができてくる。この大將やリーダーがいることが何も悪いことではない。家庭や社会において家長や上役がいるのと同じである。大切なことはよい指導者をつくることであり、また、集団の中で自分の力に応じた適当な役割をもたすことである。権威的指導者のかわりに民主的指導者あるいは公僕的な、弱い者を助けることにほこりをもつような人間に育てていけばよい。またグループの構成を配慮して、できるだけ多くの子どもに指導者としての機会をあたえるとか、学年の変りの時に上のものが卒業して、次の者が指導者になるようなしくみにしておけば、劣等感が

発生することも少ない。同じ子どもが新人児、補佐役、指導者を経験していくことが指導者としてのよい訓練にもなる。

また、このような非等質的な集団の方が全体が一つに協力することができ、競争心はもっぱら他のグループと対抗しやすいのもつていくとよい。一つのクラスの中をことさらに性や能力あるいは年令を異にした小集団に分け、この小集団を互いに競争さすならばグループはますます結束する。この場合に小集団の中に指導者が二人できると、かえって分裂する。イギリスのバブリック・スクールでは学年別のクラスの他に、たて割りにしたハウス・システムがもうけられている。新入生たちは学校の中にあるいくつかのハウスに所属させられるが、卒業するまで同じハウスに属している。このハウスは寄宿舎になっていることも多いが、ここではハウス・マスターを中心として上級生下級生がいっしょになっている。体育やクラブ活動の場合は、このハウス単位で互いに競いあっている。このようにこの一つの学校や幼稚園をたて割りに編成するというのも意味のある分け方ではなからうか。

しかし、このようなたて割りでは、学習には都合が悪いと反対される。画一的な学習指導には確かに不便である。しかし能力に応じた指導や個性に応じた指導には、この方法の方

がかえってよい。個性教育が問題になるときは、よくクラスの生徒数が多すぎるといわれる。確かに、四、五十人の子どもを一人の教師が教育するのはむづかしい。しかし二十人にへらしてみたって個性教育はできない。おそらく四、五人の子どもにしないかぎり、一人ひとりの子どもにいきとどいた教育をするのは不可能であろう。しかし小集団に分けた場合にはそのリーダーが教師の手助けをすることができる。昔の寺子屋においては、ひとりのお師匠さんのもとに年令や学力のちがった子どもたちが一しょに教育された。年長のものがお師匠さんの代役をすることによって、案外いきとどいた教育ができておったし、また、このように人に教えてみることは学習にマイナスになるところか、正確な知識を身につけ反省的な態度で学ぶので一層よい経験である。

このように性格形成や学習の点から考えても、わざと異質的な集団を作ることには積極的な意味が考えられよう。このような点から考えて私は、能力差とか性別、あるいは早生れ・おそうまれなどの差異点を強調し、それにそくした教育を主張するのに賛成しかねる。むしろ、この差異点を無視するわけでない。そのちがいをとり入れ、それぞれのものに、ところを得さず新しい社会的教育を持たしたいものである。



## 二、三才児保育への希望



角 尾 稔

編集部からの依頼に「希望」とありますので、やかましい学問的なことをはなれて、ザックバランに、希望を述べてみることにいたします。

### 四、五才児保育の水ましでないものを

幼稚園でも、最近是三才児保育が、ずいぶんふえてきました。そのあるものは、幼稚園が急にふえたこと、また都心部などでは幼児数が減ったことなどから、余裕のできた施設・設備が転用されて三才児保育が行なわれることが多いようです。

三才児保育を行なうにいたった理由はともかくとして、実際におこなっていくからには、三才児保育にふさわしい保育をやってほしいものと思います。四才児、五才児の保育を程度を下

け、水ましたような気持ではやってもらいたくありません。

### 家庭の教育観まで指導する

二、三才児保育を依頼してくる親を眺めてみると、四、五才になっただけからわが子の保育を依頼してくる親とくらべて、ずいぶん違いがあるのを感じます。

二、三才児保育を希望する親の中には、一部には「少しでも早くからよい教育を」と望む親があり、他の一部には「家では面倒が見られないからどこかをお願いして」という親があります。早教育を目指す親たちの中には、とかくゆき過ぎた知的教育を圖に期待しています。そして他の親たちは、この年令の教育的意義については全くといっていいほど無関心な親がいるわ

けです。

つまり、一年保育や二年保育の親にくらべて、極端に考え方の違う親がいっしょになっているのが、三年保育だといえます。ですから、保育者として、しっかりとした考えをもち、二、三才児の保育がどうなくてはならないかを親たちに示し、子どもの本当の幸福のために、親たちを巻きこんでいく努力と実践を期待せずにはいられません。

こうしたことは、二、三才児であるから、とくに親との連絡を緊密にしないといけないという毎日の保育のための連絡以上のものを指しているのです。ハナ紙、ハンカチを忘れずにもたせてほしい、迎えの時間におくれないように来てほしいといったことはもちろんですが、家庭と幼稚園とが理解し合い協力し合って、よりよい指導をしていく体制がうちたてられなければなりません。

二、三才児の保育は、四、五才児の親たちが、園に対して、「おねがいします」といって依頼してくるのを引き受けるのは、異った覚悟でひき受けてほしいものです。

## 二、三才児にふさわしい施設・設備を

今まで年長児の保育をしていたところで、その施設を二、三才児向きに転用しようとする際など、とくに施設・設備の充実

に心掛けなくてはならない点でしょう。もう何年間も、二、三才児保育をしているところで、費用の点などから不便をしのいで、不十分な施設で保育をやっているところを見かけます。

例えば手洗いが高過ぎて不便だ、蛇口の口径が大き過ぎる、操作が二、三才児向きでない、便所が暗い、便器の数がすくない、大きな構造が二、三才児向きでない。給食施設・設備がない、異敷きの場所が狭い、玩具の数が少ない、玩具の種類は多いが、同じ種類のものを多数ほしい、といったことがたくさんあります。

こうした施設・設備が、ととのっていないということは、園の財政に関係することで、なかなか思うようにならないでしょう。しかし、子どもが失敗することが多くて、保育者として、手がかるというだけの問題ではなく、そこでは子どもの基本的な生活習慣の教育がしにくい、いや応々にして、好ましくからざる習慣を身につけてしまうものであることに注目すべきです。よくない施設をがまんして使っている保育者の忍耐強さは、決して美談ではなく、正しく順調に生育させられるべき幼児に対する冒とくときえなるのです。

次に施設・設備の点で、私が二、三才児保育にとくにのぞきたい点をあげてみましょう(前述の施設・設備の不都合な点の

例であげたものと重複するものはぶきます。

## ○便 器

既設の便器の数をふやしたり、取りかえることは困難でも、おまるを買いこんで、用意することは比較的容易でしょう。おまるは、ある時期がくれば卒業してしまうものではありませんが、家庭生活ではまだまだ使っている年令のことですから、園でも用意しておくことは、災を転じて福となすと同様の効果があると思います。

小便器の高さの高過ぎるところでは、床を高くするぐらいの気持で、立派なすのこを置いてやりましょう。簡単な踏み台や、白木造りでグタグタするすのこはかえって逆効果です。

## ○日当りのいい広い保育室を

二、三才児は人数が少ないからといって、保育室が狭くていいわけではない。並行的に同じような遊びを、めいめいの子どもがやりたい年令であるし、広い部屋がほしいものです。家庭にはないような広い空間が、園にあるということが望まれる条件といえましょう。

## ○遊具・玩具

孤立しがちな子どもを、一対一で——しかもべたべたしたものでなく——遊べる遊具や玩具がほしいと思います。箱プランコ、連結できる貨車、三、四人で乗れる木馬、向きあつ

て球ころがしをするための大きなマリ、といったたぐいのものをぞみます。

種類の多いことよりも、同一の玩具を多数そなえておいてほしいものです。

## 感情・情緒の教育を

二、三才児保育に何をのぞむかといわれて、「何かできるように、覚えるように」といった知的・能力的なことよりも、むしろ、感情や情緒の円満な成熟ほど期待したいものはない。このことは、極言すれば、いわゆる基本的な行動様式のしつけ以上に望みたいことです。

二、三才児保育によって、手が洗える、ひとりで、食事ができる、便所で用をすまうことができる。……こうした自分の始末が自分でできるようになるということも、表面的な行動だけにとらわれて、喜んでいたくない。たしかに、四、五才児から保育をはじめると二、三才からはじめる方が、子どももスムーズに保育者のことばを受けとめるし、友だちにならって学習する。それ故にこそ効果的であることは、よくわかるのだが、むしろ、子どもが、自分の周囲の事物・できごとに対して、望ましい感じ方・考え方をもち、安定した感情・情緒でいられる子どもに育てることに重点をおいてほしいものです。



一輪の花を見ても、名前を覚えたり、その名前を知っていることが自慢でならない子どもよりも、その一輪の花の美しさを喜び、ひとりぼっちで淋しそうだねといった心がもて、お水を飲ませてあげましょう、といった積極的な子どもに育てることを考えてほしいものです。

二、三才児は、ちょっとした気に入らないことに對しても感情に激しく、見さかいのない状態によくなるものです。でも、自分のとりかこんでいる人たちの親切、おだやかな行動のなかから好ましいパーソナリティが形成するようにしてほしいのです。頭でする分別のある子どもに育成しようとするよりも、理屈でなく感情・情緒の自然なあらわれが、結果として望ましい行動になっているような子どもでありたいと思うのです。

「そんなことをしてはいけません。よその人が迷惑します」こういった禁止のことばによって、子どもたちに、ハわがまま勝手な行動が人に迷惑を及ぼすからいけないことだVといった形で理解する。だが、人間の行動は——もちろんこうした理解の上に立つという側面もあるが——もっと感情的・情緒的な基盤から考えてみなくてはなるまい。二、三才児の保育に、わたくしは、保育者がおだやかなかに人間的感情のこもった保育の行なわれることを期待してやみません。もう少し年長の子どもには通用することでも、この年令の子どもには通用しないこと

がたくさんある。「積木をかたづけましょうね」ということもある時期には悪くはない、だが「積木さんが、お家へ帰りたいっていつてますよ、運転手さん！」のせていつてあげてください」これに似たようなげ、方が必要な二、三才児です。

#### 成長の細かな記録を

成長・発達のはげしい時代の二、三才児を保育するのであるから、子どもの成長の細かな記録をとって、ひとりひとりの成長の足どりをよくつかみながら保育してほしいものです。多くの保育者は、そうしたことは心の中にしまい込んで、出たとこ勝負の名人芸的保育を展開していつてます。

でも、今後の二、三才児保育に期待するものが多いだけに、「二、三才児保育」の成長のために役立つ記録がほしいものです。それは、回想として語られる逸話ではなく、個々の子どもの生活・行動の変化の細かな記録です。その中に、二、三才児としてはじめて集団の生活にはいった子どもの変化が記録され、二、三才児保育が、名人芸から一般化され、科学化される日もくることを期待したいところです。

(東京学芸大学)

\* \* \*

# 三才児保育の重要なこと



南 信 子

私どもの **Nursery School** は幼稚園入園前の三才児のための教育施設として、昭和二十九年五月に開設されました。開設の主な動機は、三才を過ぎた子どもたちがもはや家庭の生活だけでは満足できない成長発達の状態にあることを、多くの母親たちが実感しており、三才児のためのよい教育施設を求めている人々が意外に多いことを見聞したことに端を発します。何とかしてこの要望にこたえたいと念願いたしました。これらの子どもたちを幼稚園に三年保育として入園させることには種々の問題があることを思い、三才児のために独自の保育の場が必要であることを痛感し **Nursery School** の実現に努力いたしました。

**Nursery School** という名前は一般には非常に理解されにくいことを思い、もっと親しみやすい日本語にと考えたのでありますが、適当な名前がなく、結局欧米における教育施設としての **Nursery School** の目的や方法に共感し、その伝統を日本の地に生かしてみた

いという希望のもとに、そのまま **Nursery School** とよびおこなしました。このことはまた、開設にあたってこれを直接指導されたアメリカのスミス大学で、**Nursery School** の講座を担当されていたウイン女史を覚える意味にもなったのであります。

開設以来十年の年月を経過しようとしています。研究は思うにまかせず、その資料も微々たるもので発表の段階ではありませんが毎日の生きた子どもたちの生活を通して、三才児保育の重要なこと一端にふれてみたいと思います。

## \* 楽しい遊びの場としての **Nursery School**

三才児の生きがい遊びであるといつてよいと思います。彼らからこれを除けば何が残るでしょうか。遊びは楽しい経験であり、この楽しさは彼らの人生にとってかけがえのないものです。子どもたちは遊びにその全生命を打ちこみます。私どもの **Nursery School** のプログラムの大部分は自由遊びであります。この時間に子ども

たちはどんな遊びを誰と、どのように展開させるかは教師たちの最大関心事です。二十五人の子どもたちをみつめる三人の先生の目は真剣そのものです。このために環境をととのえ、反応を観察し、指導をあやまらないことを心がけねばなりません。この遊びを通して行動の型が形成され、人と物に対する本質的な把握をするといえましょう。物の見方、感じ方、考え方の方向づけをし、それが望ましい状態で伸びてゆくために深い心づかいが必要です。ある日の自由遊びから学んだことの一つ二つを紹介したいと思います。

A君、保育室の中でワゴンをはひっぱりまわしています。積木も人も人形もバズルもみんなワゴンに投げこんで走ります。他の子どもが遊んでいる積木まで取り上げてゆきます。しかし何と活発な機敏な動作でしょう。あっけにとられて見ている子ども、怒って積木をとりかえしにゆく子ども、しかしA君は落ちついた態度でそれに応じています。先生の目がA君の行動のあとをおっています。

何分たつたでしょうか。A君、今度はベンキ屋さんになって静かにワゴンにベンキをぬっています。空罐に刷毛が彼の道具です。もちろんベンキは入っていません。しかし何と真剣な面持ちでしょう、手つきのよいこと。そして、ちゃんと中に入っているものを皆取り出していいねいにぬっています。そばに人がくるとベンキぬりたて、さわってはおだめ、と注意します。ワゴンから出した人形や絵本の中からさつき取りあげてきた積木をかえしにゆきました。別人のようです。私はこの二つの場面にあらわれたA君の変化に驚かざる

をえません。それと同時にこの二つの場面の中に彼の行動を方向づけた先生の行き届いた指導があったことを見逃すことができません。三才児独得のその活動力、想像力の豊かさ、自己表現の巧みさ、乱暴である反面、静かで神経の細かいA君の個性の特長、それらの中には、あらゆる可能性が含まれているように思われます。

保育室のもう一方の隅は美容院です。美容師はB子、お客様はC子、B子はまじめな顔でC子の髪をいじっています。櫛を使って、時々空びんのローションをさかさにしてふります。すんだ時には肩にかけていたあやしげな布をちゃんとはらって、はい、どうぞ、には恐れいります。次のお客様は何と赤ん坊をさかさにおんぶしてやってきました。やおら人形をおろしておしっこをさせます。すんだと見えて人形の両足をひろげてもらった手をこきざみに二、三度ふっています。自分が赤ん坊の時に母親にもらったことをそのままするのでしょうか。その観察眼のするとき、記憶のよさには舌をまかざるをえません。

彼らはこのような豊かな遊びの中で自ら見たり聞いたりしたことを見現いたします。それらはさまざまのごっこ遊びとなって多彩に繰りひろげられます。ごっこ遊びは三才児独得の世界です。

その楽しい雰囲気は Nursery School でなくては見られない風景です。子どもの天国そのものです。しかし三才児のためにはそのごっこ遊びにも先生の適切な指導が必要です。助言や、話しあいによってよりよい方向に遊びが発展し刻々におこるさまざまの問題が解



決されてゆきます。しかし先生の思いをこえて遊びを創造してゆく子どもたちのすばらしさには到底おとなは及びません。よくととのえられた環境と、機敏で適切な指導をする聡明な先生によって、自由遊びはいよいよ価値のあるものとなります。

遊びの相手は先生であることも少くありませんが、ほとんど子どもも同志です。子ども同志、ある時は暴力に訴え、怒りは叫びとなりまゝです。ある時には優しく、それは愛のささやきのようです。しかしともあれ、この時期の子どもたちにとって、同じような年令の友だちがあることは、彼らの成長にかけがえのない条件です。同じ赤い色のソックスをはいてきた子どもが朝玄関で一しょになり、それ以来何となく一日中親しくしているというような友情の結びつきもほほえましい限りです。フィンガーペインティングのためのエプロンのうしろのスナップは子ども同志でとめます。できないことはお互に助けあうことが大切で、それが非常に楽しいことを知ります。そばに誰がいても少しも話しかけもせず平気でいる子どももいますが、先生が適切な指導をすれば七、八人でも一しょに遊ぶことができます。ひとり遊びから平行遊びへ、やがてグループ遊びへと、先生はその一人ひとりの発達段階をよく観察して指導することが大切です。この時期に一人ひとりが安定感をもつてのびのびと他の人のことを気にかけずに自信をもって遊べるようにしむけなければなりません。また他の人と遊ぶ方法も学ばせなければなりません。他人に迷惑をかけることも少しずつ理解することができるようになる大切な時期であります。

ことばの発達の著しいことも三才児の特長といえましょう。語彙はどんどんふえてゆき、言語を媒介として友人関係が親密になり、充分に意味が理解できなくても、ことばを使用するおもしろさを経験いたします。ある日のこと、棒でボールをたたいて野球のまねをしているのをそばで見えていた子どもが、棒がうまくボールにあたらないと、大きな声で「残念でした」というのです。またある子どもが他の子どもをたたいた時、とたんに「暴力反対」と叫んだのにはほとほと感心いたしました。

新しい遊びの材料、新しい友だち、新しい環境、これらによく適応してゆくことが要求されます。先生は子どもたちに望ましい、有効な経験をさせるために毎日のカリキュラムを工夫いたします。ねんど遊び、フィンガーペイントやボスターカラーによる描画、積木による遊びなどのなかに子どもたちはあたかも小さな芸術家、建築家のように創造力を発揮いたします。絵具のチューブのふたのあけ方、しめ方、絵画がながれないようにすることや、小さい筋肉の用い方、身のこなし、身体のコントロールなども学んでゆきます。構成玩具で遊ぶうちに思考力や推理力も身につけます。内に外に大筋肉の発達を促す遊具が魅力的に配置され、子どもたちの興味をさらってゆきますが、こうした遊びに没頭しているうちに、子どもたちの手足も頭も心も成長してゆくことは何とふしぎなすばらしい事実でしょう。十姉妹がふえることに驚きの目をみはり、飼育

してある亀の子の様子をまんじりともせず眺め、おいかけてもおいかけてもつかまえられるいゝとあくことなく戯れます。小鳥も動物も彼らの友だちです。草花の芽が出、花が咲くことにも驚きの経験을 いたします。美しい音楽や童話、童謡、絵本などはほとんどの子どもたちの大好きな経験です。歌う子ども、楽器を手にする子ども、リズム反応をする子どもの姿は本当に楽しそうです。お話にききいる子どもは天使のようです。毎日与えられる芸術的香りの高い音楽や文学を通して子どもたちは豊かな情緒を育てられ、子どもなりの明るい希望にみちた人生観を築いてゆきます。見えない神様のことに ついても学びます。お祈りを覚えた子どもが、神様に今日もおいしいミルクをありがとう、ってお祈りしたら、神様が どういたしまして”とおっしゃったよと、実感をもって話します。

子どもたちにとって楽しい経験は不可欠であり、また新しい種々の経験によって日々成長し、環境に適応する力を養ってゆくのであります。それが同時に絶え間なく繰り返される毎日の生活の営みのなかで彼らは訓練されることが必要であります。

#### \* 訓練の場としての Nursery School

三才児はある時には成長のための苦しみを経験しなければなりません。反抗期とよばれる時期にも遭遇いたします。要求することはたびたび周囲のおとなから理解されず、実験したいことは禁じられます。性格の欠点是否応なくおとなから批判されます。Nursery School の先生は彼らのこの困難な立場を理解する先生でなければな

りません。それと同時に彼らのもつ多くの問題は集団生活の中で訓練される必要があることを認識し、また彼らがたくましくこれを持ちこえてゆくためには周囲のおとなの愛情のこもった暖かい励ましと指導が必要であることを覚えていなければなりません。清潔、排泄、着衣、食事、睡眠などのよい基本的習慣や、その他望ましいよい行動が習慣化するために、その具体的な指導に充分な力がそがれ、できるだけ楽しく、容易にそのことができるように配慮が必要であり、そのために先生も子どもも忍耐つよくあることが大切です。一人の先生が受けもつ子どもの人数が少いことも、三才児の保育には非常に大切な条件となります。

最後に三才児の保育は家庭との一貫した方針によって多くの教育効果が期待されます。子どもたちが家庭をはなれ、社会生活の第一歩をふみ出し、Nursery School に入園したその日から、先生は一人ひとりの子どもの成長発達をよく理解し家庭よりの報告を参考にしつつ、カリキュラムをよりよく改善することを絶えず心にかけながら、三才児保育の重要性に使命を感じ、母親と思いをつにして保育を進めてゆく時、三才児独自の教育の機会はNursery School において遺憾なく發揮され、幼児教育の本来の目的の一端を充分に達成することができると信じます。

(北陸学院保育短期大学付属ナースリー・スクール主事)

\* \* \*



## 四才児と五才児の 保育上の相違

永山 曉 美

五月の声をきく頃になると、あの忙しかった入園式後の日々が、夢のように思われます。わずか二時間余りの保育時間が、何と長く思われたことでしょうか。一刻も早く一人ひとりの新しい幼児と仲好しになり、自分の家の延長のような楽しい級の雰囲気を感じてくれるようにと、全心を傾けた毎日——ようよう、一段落ついたというところでしょうか。大方の幼児が先生の手をはなれたこの頃、かえって快い疲れが感じられますが、さあ、これから、皆で検討して立てた一年間の目標に向かってそれぞれの級は手を取り合って、張り切って出発しましょう。

ここは三才児一級、四才児五級、五才児六級、全園児四六〇名という大世帯の幼稚園なので、園内を歩いて見ると、それぞれの年齢の特徴がとてよく分かります。

三才児の室を覗いて見ると、四、五才児の級とは、まるで違った世界が感じられ、一人遊び、平行遊びに打ち込んでいて、横目でちらっと見ても、入室者にはお構いなしというところです。ある時は先生のまわりに鈴なりになって、親どりとひよこのようにお庭で遊んでいます。時々、赤くふくらんだりんごのほっぺの方が鼻よりも高そうな幼児が、すごいスピードで庭を走りまわっては、また自分の室にもどってきたりしています。

幼稚園を約半々する四才児と五才児の保育室は、右と左に分かれて固まっています。やはり一年の年齢の差は、こうも違うものかと思うことがしばしばあります。

入園テストを見ても、四才児の日と五才児の日では、親に頼る気持、先生の言うことに対する理解、身体の動きの活発さ、所要時間



など著しく違っています。

また、入園式が終って保育室に戻る時、五才児なら二列に並んで歩くことは容易にできることなのですが、四才児では二人は手をつないでいるものの、どこへでもとび出して歩くので、四列にも六列にもなってしまうたり、果ては他の組の列に入り混ってしまう人もあったりして、並んで歩くということが、四才児にとってはこれほど難しいものかと思わされます。

× × ×

一年間を通して考えてみると、五才児には生活指導と共に、社会生活を身につけて、一年間の終りには、小学校に進学する体制を整えるという目標があります。三学期を迎える頃になれば、遅れがちの人には、自然の発達を待つばかりでなく、周囲の者が後押しをしなくても、ある程度、集中して話を聞くことができ、仕事に対する意欲や、時間内に物事をやり遂げるように努力する態度などを養わなければならぬと思います。

この点、四才児は、十分に遊びながら、一年をかけて生活指導を確立し、一人ひとりのさまざまな芽生えの、よいものを育くむ余裕があります。

また、日々の保育をするにあたって、五才児の場合に特に注意しなければならぬことは、自由遊びを大いにして、型にはまらないよう、個性を失わないようにすること、他から与えられる力でない

く、自分自身の力を引き出して伸ばしてゆくということではないかと思います。

四才児ですと、自分のやりたいこと、納得のいかないことは、注意を受けても平気で続けたり強行したりという、自己を主張する場面がしばしば見受けられるようです。スクール・バスの中で、席があいているのに、どうしても立っているという人、落したハンカチに自分の名前が書いてあるのに（字が読めない故もあって）、「自分のではない」と言い張って受け取ろうとしない人など、四才児には、たいていその人特有の逸話があるようです。五才児になるとこの、特徴をつかみ、個性に応じた指導の方針を立てるのが難しくなるのではないのでしょうか。集団の中にあっても自分の意見をはっきりもち、それに伴う責任ある行動がとれるよう指導できればと思います。

表現活動に対する心構えとして、五才児では、できるだけ、自分で発案し、工夫し、完成するように誘導し、先生はよくそれを見守って、必要に応じて助言をする立場であり、四才児では、先生と一緒に発案し、できるだけ工夫するように興味を誘ったり、励ましたりいたします。またその持続時間は、五才児と四才児ではかなりの差があるので、年令、時期に応じた時間をよく考えて、無理にならないよう注意しなければならないと思います。

それから、運動について考えるとき、四才児と五才児では体の発育

状態が違うという事を知っていなければならないと思います。四才児になると、おとなと同じように歩けたり、四才児に比べかなり運動機能が発達したというものの、大きい筋肉と小さい筋肉が調和して働くところまでいかなないので、体の動きのなめらかさ、平衡が充分でないということです。危険なものや高度の遊具によく注意して、少しくらい衣服を汚しても、思いきって遊び、疲れたら休息をさせることが大切だと思います。五才児になる頃には、だんだんにおとなと同じような腹式呼吸になるといわれますが、そういえば、かなりの運動に疲れないようになり、相当の距離を走れたりします。

また、乳歯が抜け始め、永久歯が生え、自分でも「大きくなった」という自覚ができて、何となく落ち着いてくるのもこの頃のようにです。そこで、五才児には体の発育を促す、運動量の多いもので、構力、創造力を伸ばすような遊具などを身近において、全身の調和や平衡能力を養えるように留意したいと思います。雨の日でも、広い遊戯室には大積木、飛箱、平均台、相撲マットなどがあり、幼稚園ならではの、こんなすばらしい遊びはできないと思います。

保育室の環境設定をする上にも、四才児と五才児では、扱い方が違ってくると思います。四才児は情緒に富み、想像力がたくましく、動物やお人形にも、名前をつけて遊び、絵をかくにしてもたくさん、動物や色を並べて使ったり、描いているうちに、何かの形や説明が生れてきたりというふうですから、保育室も自由な雰囲気が必要だ

と思います。幼児たちの表現したものの飾り方にもいろいろと工夫して変化をもたせたり、幼児たちの自由に描いたり、飾ったりする空間を用意しておくことや、形の固定しない遊具なども豊富にそろえておきたいと思います。五才児の保育室には、のびのびと明るい雰囲気の中に時間、月日、季節の移り変わり、それに幼児に興味ある社会のできごとなどを、どこかの片隅にでも取り入れ、事物に対する興味や疑問を起させるように環境を整えたいと思います。

けんかについても、四才児と五才児では原因が十分違ってきます。四才児では遊具の所有や、順番とか、グループ遊びの中での譲り合いができなかったり、主として社会性の未発達からくることが多いのに比べ、五才児になると、けんかが少なくなる代りに、自分の所有物や権利が侵される時、それが他人の場合にでも激しいけんかになることがあります。どちらの言い分もよく聞いて、理由をはっきりさせ、こういう機会に寛容ということなども身につけられるのではないでしょうか。二期期の末頃、「野口英世」とか「フランダースの犬」とか「七つの星」などのお話を聞いたり、紙芝居を見たりした時、感激して鼻をすすする幼児も見受けられました。他人のためにつくすという行為に、これだけ感銘を受けるということは、五才児後期の指導に加えられてもよいことだと思います。

これまで「五才児」と一口に言ってきましたが、一年保育の幼

児と、二年または三年保育の幼児では、一学期のうちは殊に、保育の上で差があるのは当然のことです。四月、五月の頃は、一年保育五才児と四才児の指導は、ある場合には同じであってよいと思います。何といっても一年保育の幼児は、一年間に四才児と五才児の過程を、急ぎ足で通らなければならないので、たいへん忙しい一年であるわけです。

最後に、昨年末のクリスマスお遊戯会に現われた、サンタクロースに示した三才児、四才児、五才児の反応がおそらくだったので記したいと思います。

年少組と年長組とは、続いた別の日に会をいたしました。始めの日、「サンタクロースの歌」の半ば程からある先生の扮するサンタクロースのおじさんが現われると、じっとみつめて、だんだん後退り始めた三才の女児が、いきなり「わあっ」と泣き出して、先生にしがみつき、しゃくりあけながら、それでも最後までサンタのおじさんを見送っていました。他の三才児は歌をうたう事を忘れて、ふしきそうに見上げていました。四才児はすぐに、「サンタクロースだよ」と、ざわめき始め、遂に歌はピアノだけになってしまいました。

次の日、五才児のある級の「サンタのおじいさん」の合奏の時、ステージの袖からサンタクロースが登場しました。そばにいた幼児

は、びっくりした様子で、サンタクロースの方にすっかり気をとられてしまいました。が、それでも歌や、合奏は、ピアノと共に終りまで聞えてきました。

三才児 「ほんとにサンタのおじいさんがきたね」

四才児 「サンタクロースに握手されて嬉しかったけど、気味が悪かったよ」

五才児 「お面の下に首が見えていたから、サンタクロースは人間だよ」

「先生かも知れないね」

「長靴はぬれているし、変だなあ」

× × ×

思えば、三才児から五才児まで、人間形成の最も大切な時期を預かる私たちは、もって幼児について勉強をし、観察し、研究しながら、今の時期でなければできない幼児の教育に、できるだけの努力をしてゆかなければならないと思います。

(洗足学園幼稚園)

× × ×  
× × ×



## 五才児の保育

——子どもたちの話し合い——

石井達子

五才児後半の保育ということで、言語生活の中の「子どもたちの話し合い」について書いてみたいと思います。

子どもたちの未分化な生活状態をみていますと、どこまでが〇〇生活で、どこまでが△△生活だというような区別をすることはむずかしく、わけても、言語生活は子どもたちのいろいろな生活面と深いつながりがあり、これだけを切り離してうんぬんすることは、多くの問題があります。しかし今のような社会でこそ、人の意見や話を素直に受け入れ、自分もまた堂々と自信をもって考えをのべたり、話し合いによってことを運んだりでき、正しいことを卒直に実行にうつせるような子どもに育てたいと願うのは私ひとりではないでしょう。そのような態度や考え方が、すべての他の行動や考え方と同じように、幼児時代のき細な経験の積み重ねから生まれると

したら、いや生まれると考えると、私共はそこにもまた、なすべきことの多くがあることを痛感いたしました。が、理論も技術も未熟なのでほんの試みという程度に終り、結論らしいものでもませんでした。「話し合う」と一口にいいますが、「合う」ということはなかなかむずかしく、幼児にそのようなことが可能かどうか、適当かどうか、またもし可能として、それをしたために幼児の心の中にどんなことが受けとめられ、積まれていくのか、その辺のところをしっかりと押えて構えた場合ではなく、こうしてみたら、こうなったという報告に過ぎませんが、以下御紹介いたします。

### 子どもの姿について

年長組になって、うれしそうな、照れくさいような、張りつめた

四、五月をすぎて、子どもたちはやっと「自分」をとりもどしたといえましょうか。緊張が落ちつきに変わり、やがて好きな遊びに打ち込む姿がほほえましく、あちこちで「その子らしさ」を発揮しはじめます。「年長組になったら急におとなしくなっちゃった。ばかにお利口になっちゃった」などという急変も影をひそめ、それぞれが本来の姿にかえって遊ぶうちに夏休みを迎えます。二学期になるとこれまた驚くくらい友だちとの結びつきが深くなり、運動会などにはその協力の姿がめだちます。五才児は五才児としての生活ながら、やがては小学校へいく子どもたちなのでそこからその点も考慮されて、三学期は一足とびに大きくなったようです。

教師としても四才児の一年間は、あるいは五才児の一学期（一年保育の場合）は、個々の子どもの性格や行動をみつめながら、いろいろな人間関係の中で集団生活になれさせていくようにしむけていきますが、五才児の後半では幼年期を更に充実させようとはりきる時でもありません。言語生活においても、上記の子どものすがたと併行して「話し合い」の場を次のようにとってみました。

#### バズ討議？（その一日目）

ねらい 一つの場（ふんいき）の中で自由に自分の話したいことを話す。

場面 保育室の中で円型に腰かける。

教師 「先生ね、ちょっと御用ができて五分くらい職員室でお話

していますから、そのあいだね、皆も腰かけたままおとなりの友だちと好きにおしゃべりしていてね。でもね、何かお約束きめておかなくて大丈夫？」いつの間にか先生の言おうとすることを感じとってしまう子が何人かいる。「お話をするときは静かに！」と子どもたち。「そうね、自分たちだけ大きな声でお話していると他の人のお話の邪魔になるわね。小さい声でお話しようね。それからもう一つお約束しておいた方がいいと思うことがあるの。いま腰かけている席から離れてはいけませんよ。自分のお隣りにいる人とお話するのね。それじゃいってきますね」「先生、僕お話なんかいいよ」と、そーっといいいくるＴ君。「ない人はだまってお友だちの話きいていればいいわ、ね」と言いおいて保育室をでる。観察室があればそこにはいい、子どもたちがおしゃべりしているようすを記録したい。が、ないので子どもたちの目のつかない所で声をきく。五分くらいたった頃、保育室に「ただいま」といってもどつていく。ガヤガヤ、ワイワイが一瞬おさまる。

教師 「どう？ たくさんお話できた、おもしろかった？」とい

#### バズ討議？（その二日目）

ねらい 前回と同じ

場面 楽隊あそびをする前の数分間、保育室内に円型に腰かける。

教師 「先生ね、楽器をもってきますからね、その間、この間み

たいにお隣りの友だちと好きなお話をしているね。お約束もこの前の時と同じよ。」と言いいて楽器をとりいき、楽器をもって静かに室内にはいり、楽器をそろえるようすを装って子どもたちの状態を観察する。楽器を、三回にわけて運び、その間に子どもたちのようすを観察する。

#### ハズ討議？（第三日目）

前二回とほとんど同じかたちで行なう。

#### ハズ討議？（第四日目）

ねらい 自由に話す、今話していたことを友だちに発表する。

場面 リズム遊びのため集まった時の数分間、保育室内で円型に腰かける。

教師、前三回とほとんど同様にして話させるが、保育室にもどってきた時、「おもしろかった？ 今ね、何のお話をしていたのか、先生や友だちに教えてちょうだい」といって子どもたちを見まわす。「誰でもいいわ、お話したいひと？」「先生ね」とそばに寄ってきてそーっと教えてくれる子もいる。「先生！」と手をあげて言おうとする子もいる。「僕たちね」と二人称で報告する子もいる。話題は多種多様である。デパートにいった何かを買った話、ロケツトの話、飼育している鳥、犬の話など、五、六人の子どもが話をする。

このようにして討議？を五、六回くり返すうち、

・皆が話し合いの場になれ、

- ・いろいろな友だちと話し、
- ・話題が豊富になり、
- ・発表しようとする子どもが多くなり、
- ・先生が保育室内にいても平気でその時間内は自由におしゃべりすることになった

#### ハズ討議？（第七日目）

ねらい 一つの話題について、好きな友だちと自由に話す。

場面 保育室内で自由体型、好きな友だちと組む。

教師 「今日はね、一つのことを皆がお話しましょう」「先生一つのことってどんなこと」「何のことかわからないな」という顔をして黙っている子もある。「あのね、いつも好きなこと勝手におしゃべりするでしょう、でもね、今日はね、動物のお話しましょう。動物のことならなんでもいいのよ。動物の話がどうしてもないひとは何でもいいことにしましょう。でもね、幼稚園のお庭にいる、うさちゃんのことでもいいし、おうちでかっている猫のことでもいいのよ」といって、教師も、話のはずまないグループにはいつて話をはじめ、他のグループからこんな声がきこえてくる。T子、U子、Y子の三人だ。

「うちに猫何匹いるかしってる？」とT子、

「知らない、知らないけど二匹？」とU子、

「ちがうわ、四匹よ。ダケに、クローニャンに、くろにチャーよ。ママ

とハハとお兄ちゃんとあたしが一匹ずつだいてねるのよ」

「のみがつかない？」とY子、

「だいじょうぶよ、いつもきれいにしてるもん」「うちのママ猫からいよ」「猫ってねずみとるわよね」「だけど、ひっつかれると痛いわよ」「あたし引っつかれたことないわ」「この間うちのダケおなべひっくりかえしたの、そしたら、いなくなっちゃったから、どうしたのかと思ったたら、コタツの中でおとなしくしてるのよ、悪いことしたと思ったのね、きつと」

女兒だけのグループと男児だけのグループとは話題の運び方が何となく違うなと思う。短い時間だがこのような楽しい話し合いの場をつみ重ねていくうちにかなり「話し合う」ということが上手になったようだったので次には「相談」という場をもたせてみました。

二学期も終り頃になると、設定されたグループの中で友だち同志の結びつきが非常に強くなり、グループとしての性格もできておもしろくなります。誰が当番（リーダー）になっても、スムーズにことが運ぶグループがあると思うと、どんな話し合いの時でも一もめしなないとおさまらないグループもあります。

#### 相談（第二回目）

ねらい 困ったことがあったら何でも友だちに相談する。

場面 何かものがなくなった時、忘れものをした時、製作しているときなど個々の場で、

子ども 「先生上ぐつがないの」「昨日かえる時ちゃんと靴箱の中にいれておいた？」「うん」「それじゃないなんておかしいわね、じゃね、おともだちに『知らない』ってきいてどうしたらいいか相談してごらんさい」

子ども 「先生こどうやるの」「そうねどうしたらいいかな、Mちゃんと相談してごらん」

結局は教師が教えることになることもありますが、なるべく友だち同志相談するという場をふませます。

#### みんなで相談（第二回目）

ねらい 一つの目的に向かってグループのメンバーが皆で相談して作る。

場面 保育室内で各グループにわかれて、長期欠席のお友だちに お見舞いの品を相談して作る。

このような相談の場面は、どこでもよく見かけますが、どんな場合でも

- ・やさしい方からむずかしい方へ、
- ・何度もくり返しくり返しする（経験させる）、
- などが大切でしょうか。

以上五才児の生活のほんの一断面にすぎませんが、こんなき細な心やりで、気楽に話せる、素直にきける子どもにしてやりたいものだと思います。

（文京第一幼稚園）

# アメリカの幼稚園教育など

斎藤 敏夫

## 1 アメリカの初等教育

「教育はその国の社会的・歴史的背景の上に成り立っている」という、極めて素朴な形で旅する態度を定めながら、ほぼ一か月の間アメリカ各地の学校や教育機関を訪ねたことになりました。

ロスアンゼルス・サンフランシスコの二つの都市では、特に「教育課程の展開」という課題をもっていた者としては、格別に取り立てるようなものを感じることはできませんでした。

たとえばカリフォルニア大学教育学部では、カリフォルニヤブランに対して否定的であったり、デューイを尊敬しているある小学校長さんは、校内の先生方に対する「現場での教育指

導」には、たいした熱心さが示されていないようであったりしたからです。

この明るく、平板で、伸びやかな教室風景だけではアメリカ教育を説明する材料にすることはできなかったからです。

しかし、エハNSTONの小学校を訪ねて以来、次のようなこととがらによってアメリカの教育は支えられているのではないかと考えるようになりました。

その第一は、能力別指導の徹底でありましょう。学年が能力別学級によって編成されているか、学級の中が能力別グループによって組織しているか、または両者が併用されているというような形はどこでも見られるものでした。このような形が、たいした障害もなく実施されている根底には徹底した「個人主



義」が在ると考えるのは早計でしょうか。

また能力別指導のさらにすすんだものとして、各地で盛んになってきている英才教育があります。

その第二は、ハンディキャップをもつ子どもたちの指導が特別に行なわれていることでもあります。就学可能の子どもであっても、耳の遠い子どもがありますが、この子どもたちは特別の部屋で、一人の専門教師から指導を受けている場面がありました。また読書能力の劣っている子どものリーディングルーム。適応性を欠く子どもに対するアジャストメントルームなどを数えることができます。

またこの考え方の発展が、特殊教育の施設の拡充とか、特殊教育方法の適正化などをもたらしたものと考えられます。

第三は、社会教育施設の発達とその最大限の利用ということが考えられます。図書館は町のいたるところにあり、美術館や博物館なども大都市には立派なものが設けられていて、老幼を問わず実によくこれを利用していきまを見受けました。これによって、子どもたちは自主的に主体的に問題に取り組み、それを解決する術を経験していくのではないのでしょうか。

最後の項目は、家庭や近隣の社会の中で自らを大切にしながらも他人を尊重するという民主的な考え方や態度が培われ、きまりや規則に従う態度が育てられている様子が見られます。

これは、入学早々の一年生の姿や、幼稚園の子どもからもうかがえますし、公園や科学博物館、美術館などの子どもや、若い母親の態度からも汲みとることが出来ます。また幼児をもつ日本人の父親からも、その幼児を通して見た彼らの様子を知ることができました。

以上は、アメリカの初等教育を支えている要素とも考えられますが、教育内容の上で特に著しくあらわれている重点のようなものを次に記述してみたいと思います。

そのひとつはアメリカ化の問題であり、これはアメリカの愛国教育にも通ずるものでありましょう。

いろいろな人種をかかえているアメリカでは、幼稚園はおろか小学校に入學する児童の中にも、「英語」を話せない子どもがたくさんいるということです。英語教育に大きな重点をおくことは、歴史的現実から考えて必然的なことといえましょう。また国旗を中心とした教育が、毎日行なわれていることは、多くの方がすでにご承知の通りでしょう。

サンフランシスコのある幼稚園では、午後の始業時に、先生の前に列んでいる幼児たちが先生の先唱によって「私はアメリカの国旗と自由と正義のために、神のもとに団結したこの国に忠誠を誓います」という誓いのことを述べている場面に出会いました。

またロスアンゼルス学校教育サービス部から出されているパンフレットには、愛国教育綱領といわれるようなものが掲載されています。この中は三部に分かれています。アメリカの理想やアメリカの発展に尽くした先人の功績を信ずることから、民主主義アメリカ人として実践すべきことがらの大綱が、具体的に簡潔に述べられています。特に注意させられることは、アメリカの歴史と伝統と信ずることを強調しながらも「きまりや規則を守る」ことや「人権を尊重する」こと、個人の独自性と他人との協同性を発達させること、また「知性的な市民性の練磨」などが唱えられていることです。

これは「愛国教育」がアメリカの独善的なものではなく、「自他を尊重する」という民主主義の根底からの発願であり、いわば「人道主義的国家主義」に通ずるものであるということではできないのでしょうか。

したがって、この愛国教育と国際協調主義との教育とが、共に両立し得ることもうなずくことができるといえましょう。

一九五八年に制定された「国家防衛教育法」の中では、科学教育・数学教育および外国語教育などの強化が、ガイダンスやカウンセラーの養成、その他の事項と共に、アメリカの教育重点施策として取り上げられています。そして、前項にあたるものは小学校から考えられています。この中の外国語教育の強

化は、国際理解の教育に役立つものであり、国際協調主義の教育に通ずるものであることは否定できないことでしょう。

## 2 アメリカの幼稚園教育

アメリカの幼児教育機関は、ナースリースクール（保育学校）と幼稚園であると聞いています。また幼稚園には一年制のものや二年制のものがあるとも聞きました。しかし、私どもが訪ねたものは、すべて小学校内に設けられているものであり、一年制のものであったことを最初に申し上げておきます。また私立の経営が多いといわれている保育学校を訪ねる機会が無かったことも付け加えておきます。

アメリカの小学校の校門をくぐります時に、その校名をみますと「ラファエット・エレメンタリースクール」というように、校名だけが記されていて、幼稚園名が表示されていません。質問紙を出しまして、修業年数を伺いますと、「幼稚園を通じて七年」というように記入してくれます。これは幼稚園と小学校の一貫性というよりも、一体化を形づくっているように思われます。

このような観点から、幼稚園を眺めてみますと、これを裏書きするような事がいろいろあらわれてきます。

まず教育内容について考えてみましょう。

教育のあらわれ方は、わが国のそれとは大して変っていないようです。しかし、教育課程表などをみますと、小学校とのつながりが明確に示されていることに驚かざるを得ません。これについて、一、二の例を示してみましよう。

(1) 社会科の手引書（サンフランシスコ）から

a シークェンス：四年以上略

幼稚園—家庭と学校。一年—家庭と学校。

二年—家庭、学校、近隣。

三年—サンフランシスコと入江附近。

b 学習内容：示唆された問題

〔幼稚園〕

(a) 家庭や学校における生活と健康を守るために。

イ 健康は何を必要とするか。

・きれいにして学校に来る。

・手に注意する：指を口に入れない。

・物を口に入れない。

ロ 安全にするために他人の指示に従う。

………小項目略………

ハ 安全を保つために学校で用意したものを正しく使う。

………小項目略………以下略………

(b) 家庭や学校の健康的な環境を保持し、利用するため。

学校の中の一部である、幼稚園の部や物に対する注意の仕方、必要な物を選ぶ方法、……略

(c) 個人と政府との関係についての理解。

互に助けあっている、きまりや他人に対する責任、……略

略

(d) 家庭や学校における役割を理解する。

(e) 家庭や学校における宗教的な表現力を伸ばす。

(f) 家庭や学校における美的表現力を伸ばす。

………いづれも小項目略………

これに対して一年の内容は、同様の六つの大項目の中にいくつかの小項目が示されていますが、それらの項目は幼稚園の上に積み上げられ、加えられている感じを深く受けます。

また、ワシントンの国語の「文の構造」についての一覧表をみますと「レターライティング」をはじめ「マイニユツ」にいたるまで、一七の欄が設けられています。幼稚園の場合は「レターライティング」の中では、「ノートや手紙を口づてに書く時に守る正しい形を説明する」ということと、「必要に応じて郵便にかく住所の正しい形式を説明する」という二点が示されています。また「コッピング」のところでは、「求められた時には、名まえの正しい形式を用意する」ことが示されています。

す。

そして、この一覧表には小学校の六年に至るまでの内容が示されているわけです。

続いて先生の資格についていえることは、教師の資格を取ってから低学年、幼稚園の資格を取るというように、幼稚園の先生は小学校にまでおよぶ資格をもっていることです。

この小学校、幼稚園の一体化は「国旗に対する教育」からはじまって、細かな点にまで及んでいるようです。

次に気づいたいくつかの点を列挙してみましょう。

そのひとつは、二部制度をとりながらも、一学級の人員を少なくしていることです。一、二の例外はありましたが、どの幼稚園でもその組の人数は二十名内外のように見受けられました。小学校では三十名から三十数名のところが多く、さらに能力別編成にして、個人指導の場が多くもてるように工夫されていました。幼稚園でも少数の子どもで、個人指導が徹底できるように配慮されていました。

その第二は部屋が落ちついて、明るくしかも清潔であることも特徴のひとつであると思われませんが、三時間という時間であり、最年少四才九か月という年齢でありながら、大きな個人用タオルを敷いて身体を横にして休養をとっている姿も印象的な

ものといえましょう。

第三は、カーペット式の敷物を用いて、そのまわりにすわって楽器遊びをしているのも、畳だけを考えていることに対しての、よい示唆であったように思われます。

その他ホームメーキング遊びにしても、近代的な生活環境を考えると、従来のママゴト遊びだけでよいかなどという疑問がわきます。

### 3 むすび

まとまらないことを書きつらねてきましたが、幼稚園の生活をのぞいてみても、小学校の教室を訪ねてみても、一様にいえることは教育の基本的理念が幼・小ばかりでなく、学校・家庭・社会の中に一貫していることであります。

学校・家庭・社会はそれぞれ、その場に應じた教育を独自に行ないながらも、その教育は相互に矛盾することなく補い合っているという、最も望ましい姿を瞥見し得たともいえます。

(東京 小川町幼稚園長)

\*

\*

\*

\*

\*

# おはなしをつくる

## 子どもたち

二月一日（金）、昨年五月三一日に子どもに初めてお話をきかせる場面を見せていただいた淡路町幼稚園（第六十一巻第八号 幼稚園でおはなしをするとき 渡辺桂子先生の組で 参照）をお訪ねして、子どもたちの成長ぶりを拝見しました。

◇一〇時三〇分

先生「たくみちゃんが毎日お話つくっているの。今日つづきしてくださる？『二匹の小犬』っていうのね。みんなのお話をききに來てくださった先生（記録者のこと）にわかるように最初からしてあげ



てね」

たくみ前へ出て来る。

たくみ「二匹の小犬がいました。ある時二匹の小犬がミルクを飲んでいました（第一目目はここまでつくる）。そこへブルドックがやって來ました。ブルドックが小犬をいじめました。二人で力を合わせてブルドックをやっつけました。おかあさんにあやまって（小犬のおかあさんに、ブルドックがあやまったの意）三人でミルクをのみました。夕方ブルドックが自分のおうちへ帰って行きました」

先生「きのうはここまでだったわね、じゃ今のつづきできる？ そう、してちょうだい」

たくみ「また、ブルドックと二匹の小犬があそんでいたら、隣りの犬がいじめたので、ブルドックがやっつけました」（ブルドックと二匹の小犬が仲良くなり、ブルドックが二匹の小犬のために恩返しをする、と発展している。）

先生「そう、おもしろいわね。さとしちゃんできる？ まいごというのね」

さとし「自動車にのってお出かけしました。おりたらまいごになっ

てしまいました。自動車にまたのつておうちへ帰りました。牛乳とジュースを飲んでねました。朝になって目がさめたら外に自動車がいっぱいありました（昨日はここまで）。

「今日は、自動車がたくさん来て、行くところがなくなったの。都電が来て自動車をとばしていつちゃった」

先生「どうもありがとう。きのう帳面にかいたお話みんなでみましよう（たて十二・じセンチ、よこ十七センチの薄地の画用紙を二つ折りにしてホッチキスでとじた帳面に鉛筆でかいたもの、絵だけのもの、絵とお話のあるもの、絵とお話の題をかいたものなどいろいろ。よいこのほんど表紙にかいてあるもの、裏表紙に、えほんにあるような名前をかく欄のあるものもある）。やすこちゃんは絵だけかいてあるの、二匹のねがいました、女のねこと、男のねがあそんでいました」（昨日子どもが先生に話したもののらしい）

子どもたち笑う。

先生は、チューリップが二つかかれた次の頁をみせて「おかあさんチューリップと子どもチューリップがねていたの」次の頁の絵をみせて「雪ダルマがおこったお話ですって、何でおこったのかしら？」

男児「ボールぶつけたから」

男児「バットでぶったから」

先生「やすこちゃんは何でおこったの？」

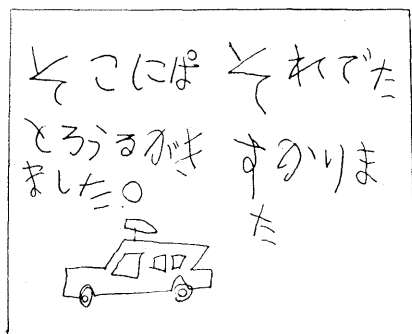
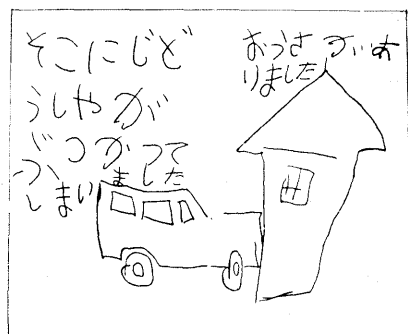
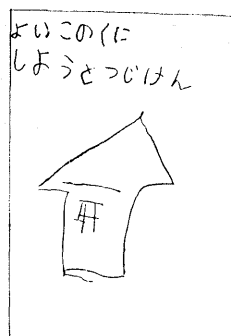
やすこ「野球のぼうでぶったの」

先生「やすこちゃんも雪ダルマがハットでぶたれたからおこったんですって。きのうこれ（帳面）をうちへ持って帰っておじいさんやおばあさんやみんなにみせたら、みんなおもしろい、おもしろいつてみたの。そしてこれほしいなあっていうのよ。でもみんな大事な帳面だからといってまた持って来たのよ（子どもたちにこにこして聞いている）。しょうこちゃん、『さかなつり』というの、しょうこちゃんよめる？」しょうこ前へ出て来る

しょうこ「じどうしゃがうちからはしってきました。そのじどうしゃにはたぬきさんがのっていました。たぬきのおじさんはさかなつりにいくつもりです。川につきました。たぬきのおじさんはささくつっていました。つれたぞつれたぞ。つながつているぞ、八びきつれたぞ。それからじどうしゃにのりにもどってうちにかえりました（句とう点はない、あとは原文のまま川と八が漢字）」

きちんとした字で横書き。子どもの声が小さいので、先生が一節ごとに繰り返して読まれる。

やまかじ（先生がもう一つあるのですってと声を入れられる）。やまがかじになりました。そこにしょうぼうしゃがきたのでやっとたすかりました。そしてしょうぼうしゃがしゃにかえっていきました。ビルがかじになりました。しょうぼうしゃがまたしゃからとびだしました。それからビルをおぼけやしきにして、ビルのしと



たちはちがうビルにひっこしをしました（おわり）（句とう点を除いて原文のまま ビルはかたかな 最初の頁に自動車の絵があるだけで、後は字のみ）

先生「かずちゃん、しょうとつじけんというの、先生がよみましたね。（第1回参照）おうちがありました。そこにじどうしゃがぶつかってしまいました。そこにばとろるがきました。それでたすかりました。それでみんなのしくらばしました。」

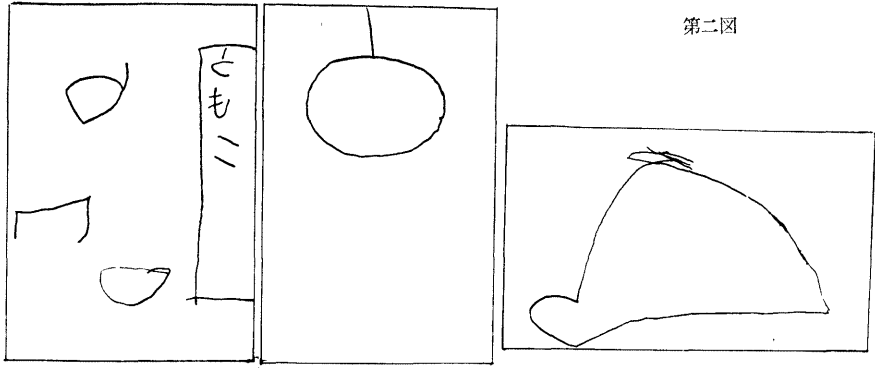
次はとも子ちゃんともこちゃん（第二回参照）のは絵だけだけど、こういうお話ですって。リングが坂道をコロコロコロコロころがって行きました。ともこちゃんがリングの後から追いかけて行きました。

た でもリングの方が早くたいたいと先に帰って来てしまいました」一同笑う。

先生「この坂道はきつと駿河台の坂道ね（ともこちゃん）。駿河台の坂の上の八百屋さんから、リングがともこちゃんのおうちまでころがったのね（ともこちゃん）。ともこは三才未満、四年保育児、最近入園。おかあさんびつくりしたでしょうね（一同笑う）。じゃ、今度は先生のつくったお話をきける？」

みんな元気よく「うん」という。うれしそう。先生はノートをみながらお話をされる。スピード君というの（二人の女児折紙をとりに行きおし始める）。タロウちゃんのおもちゃ箱でスピード君がひとり

第二図



ごとをいいました。ス  
 ビード君はとてもスビ  
 ートのでるおもちゃの  
 自動車でした。……」  
 タロウちゃんが幼稚  
 園へ行くようになった  
 ので、スビード君あそ  
 んでくれる人がなくな  
 ったいくつしていた  
 とうとうスビード君は  
 ひとりで散歩に行くこ  
 とにした。ねこのミイ  
 ヤをひきそうになつた  
 り、えんがわから庭へ  
 ガタンとついたらくし  
 たりしたが、げんきな  
 スビード君はだいじょ  
 うぶ。庭じゅうぐるぐ  
 る走りまわっている  
 と、「スビード君」と  
 金魚のヒラヒラに声を

かけられ、とうとう、金魚のヒラヒラとおおぜいのヒラヒラの友だ  
 ちをのせて池の中を走ることになった。ブーブーブクブクブクブ  
 ク、ブーブーブクブクブクブク。「わーい。ゆかいだなあ」「スビー  
 ト君はんざい」金魚たちは大はしゃぎ、スビード君もすっかりゆか  
 いになったというお話（要約）。

子どもたちは、ブーブーブクブクブクブクブクブクブクブクブク  
 ンと池へとびこんだというところで声をたてて笑う。

◆一・〇〇

先生「またきのうのようにお話をかいてくださる？」といいなが  
 ら、昨日と同じ大きさの新しい帳面を配る。帳面が輪のままになっ  
 ている。

「ハサミで切ってちょうだい。どこ切っていいかわからない人  
 は、わかる人に教えてもらってね」ドンドン切ってゆく子、「どこ  
 切るの？」と友だちにきく子、「どこ切るの？」ときく子などいろ  
 いろ

◆一・〇五

子ども「かいていいの？」

先生「どうぞかいてください」

◆一・〇八

ともこ、リングとうちをかいたと出しに来る。うちはただ四角が  
 かいてあるだけ。



先生「きょうはともちゃんにあげるわ」と帳面をとどこに渡す。

楽しそうに話をしながらかいている子、だまってかいている子。

先生「すんだら、運動場つかっているから講堂であそびましょう」

とも子、机の上にあがって運動場みる

男児「ああ机の上にあがっている」

先生「おりる。すぐおりるわよ。おりこうだもの」とも子おりる。

ひとりで笑いながらかいている子、話しながらく子、一同いっしょうけんめい。

◇一一・一五

女児（四年保育児）帳面を持って来て「お花がころころとところがつたの。（花がかいてある）どこへときくと「おうちへ」と説明してくれる

先生「あなたにあげるわ、ともちゃんとあそびましょう」

次々とかけた子が説明に来る

男児（五才）「おうちに車がぶつかったの。そして救急車が来たの」さっき読んだお友だちのお話のまねが多い。

先生は、人のをまねしますが本当のものがでる過程としてよいと思っと思っていますと話してくださった。

また、画用紙のような大きい紙を与えても、お話はかいてくれないうこと。「鉛筆と、小さい紙の方がかきこみやすいらしいのですよ。本当の絵の時は、大きい紙を与えますけど。同じような絵を

かいていても、こっちはお話と意識してかいているのですね」と話された

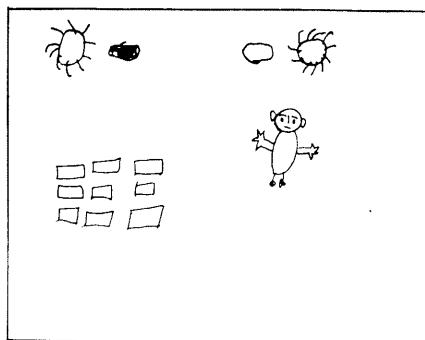
◇一一・三〇

先生「給食の時間になったからつつきはまたしましょう」半分以上の子はかき終っていた。

食事中は「わたしはタマコが好き」「ぼくは何が好き」と食べ物の話。「夜は暗い、朝は？ 自動車は走る、飛行機は？ ライオンは強い、うさぎは？ おとうさんは男、おかあさんは？」と知能テストの本を覚えて来て（父親に問題を出された由）友だちに問題を出す男児、「第一チャネルの何時は何だ」とテレビの話をする女児、グループごとに楽しそうに話がはずむ。

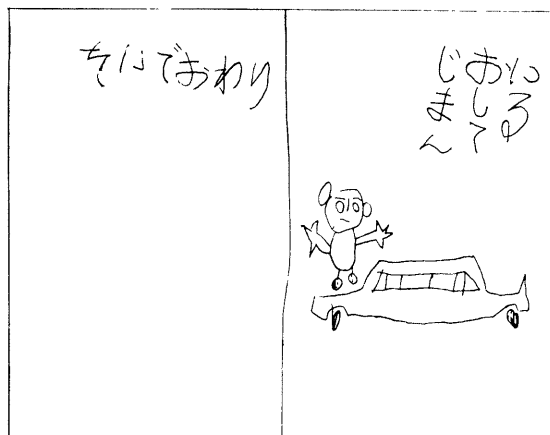
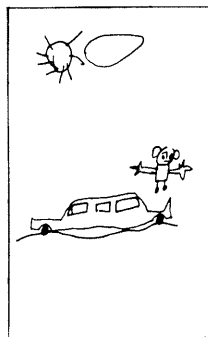
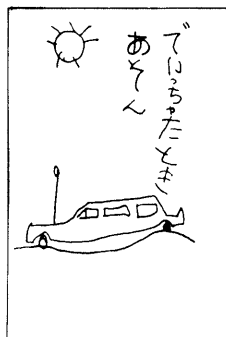
食後砂場の数人のグループをみると、みんなが砂のおだんごをつくっているが、「おだんご大会にしようか」「大きいのが一番にしようか」大きいのと小さいのを一番にすればという先生の提案に、「これはハカハカ賞にしようか、これは何賞にしよう」と楽しそうに話が發展。テレビを思い出して「これ時限爆弾だよっておにぎり渡したのに、ちっとも爆発しないのな、ほんとおにぎりだったのな」と話している子もある。

◇ 子どもたちが二時に帰ってから、御用のある村山桂子先生と、十分ばかり立話をしました。



えほん かんじ  
あそびでいたる  
はたかあったの  
じじいあつた  
あそびにいた  
おはなし

第三図



◇子どもにお話をつくらせる目的  
皆の前でしゃべること、つくる意欲をもたせることの二つです。  
内容は不完全ですが、右のことができればよいと思っています。一  
つでも良いものができたときは皆の前で発表し、みんなの中から生  
まれたのだと一しょに喜びます。そうすると、人前で話のできない  
子まで話がしたくしょうがなくなります。

◇ たいへん小さい子もいるようですが。

この組は二年保育、三年保育、四年保育の混合で、四年保育児が四人ばかりいます。毎月のように新しい子が入りますので、なかなかクラスとしてまとまりません。また年齢差がありますので、クラス全体でつづき話をつくるなどということができません。

◇ 初めて子どもにお話をされた五月から、このように子どもたち自身がお話をつくるまでにどんな苦労をされましたか。

別に特別なことをしません。毎日お話をきかせるようになったのも今年になってからです。夏に男の子たちが、何人も犬のたくさんついた洋服を着て来たものですから、あの、犬の洋服の話がビツタリ of 感じに思えたのでその話をしたら（いつもいばっているのでみんなからきられている男児が、犬がいっぱいかいてある新しい洋服を着て幼稚園に来了。いばっている、犬がみんな洋服からとび出して逃げ出した。たすけてくれと叫んだところ、お友だちがみんな犬をつかまえてくれた。男の子がありがとうといった話）、みんな大喜びで、それからお話に興味をもち始めました。

◇ 字がよくかけますね。

自然に覚えてかいているようです。強制していません。

◇ 動物が一匹になったり、ひとりになったりしていますね。

ええ、自分と同じように感じているところではひとり、ふたりとっています。その方が親しみやすくびったりくるのでしょう。動

物は何て数えるのといえは一匹、二匹といいますが、これは何も注意しないでそのままにしています。

◇ 毎日お話をつくっている子は何人もいるのですか。

特に好きな子だけで何人もいません。まだ思いついたことを並べるだけでお話になっていない子が大部分です。

◇ 「さかなつり」のお話は、四才児にしては字もしっかりしているし、「さつそく」などということばが使われていたりして驚きました。「つれたぞ、つれたぞ、つながつているぞ、八びきつれたぞ」というところでは、きている子どもたちも喜びましたが、たいへんおもしろいお話でした。「それでみんなたのしくしました」と結ぶ「しょうとつじけん」では、いかにも楽しそうな絵がかかれています。ほとんど絵ばかりのものも、「じまんをしている」などという説明にぴったりの絵がかかれています（第三回参照）。たいへん楽しい半日を過ごさせていただきました。

### ○ 幼児教育講習会

（主催 日本幼稚園協会）

会期 昭和38年7月22（月）～25（木）の4日間

午前の部（9時～12時） 午後の部（1時～4時）

会場 お茶の水女子大学講堂及び体育館

# 幼稚園は何をするとおころか

④



津 守 真

前回には、遊びを發展させる、ということについて述べた。

遊びは放任しておいたのでは低調になってしまう。あるいはきまりきった活動のくりかえしになってしまう。しかし、幼児の遊びの中には、みちあふれようとするエネルギーを認めることができる。ここから出発して、これに道をつけてゆけば、多くの發展的な活動を期待することができるであろう。遊びというと、ただ放っておいて子どもの好きに任せるように考えられやすいが、表面、活発に自由に遊んでいるかのように見えるその背後には、教師の側の準備と、見通しと、指導の果す役割は大きいのである。

今回は、幼稚園における、教師の側からの積極的な方向づけの問題について考えてみたいと思う。

幼稚園期における子どもの活動についての見通し

入園したての幼児は、弱々しく、不安で、まだ幼いかわいらしい子どもである。たとえ強そうにみえても、それは弱さの裏がえしである。それが幼稚園で二年、三年を過して卒業するころになると、もはや不安の影は消えて、体力もあり、自己主張をし、先生に反抗することを喜ぶような存在になっている。幼稚園にいる期間に、幼児は目ざましい変化をとげるのである。この期間にじっと目をとめて、その変化のあとをたどるとき、実に、幼児は動いて發達しているものであることを感じる。いつ変化するのはよくわからない。しかし最初の頃と、終の頃とを比べてみると明らかに変化している。多分、毎日、動いて

変化しているのだろう。

幼稚園の毎日の生活に目をとめてみる。これも動きがいちじらしい。朝来て帰るまで、教師の予期しない活動や言動にきつとぶつかる。十分前と、十分後の活動の状況はすっかりかわっているのも当り前のことである。離合集散するグループの動きに目をとめてもおもしろい。ある子どもとある子どもとが寄り合い離れ、また別の子どもが近づき遠ざかってゆく。それが自然に行なわれて、子どもたちの間では何のふしぎもない。その中で個人の子どものとりくむ活動にも変化がある。まだ自分にぴったりとした活動を見つけることができなくて没頭できないでいる子どももある。とうとう幼稚園に来ている間中、そうして過してしまう子どももある。自分にふさわしい活動を見つけた子どもは、次から次へと興味を發展させてゆく。そのような子どもの刻々の活動の変化は、見守るのに楽しいものである。幼児を実際に扱うものに与えられる貴重な特権であろう。

このように、日々変化し、動いている幼児の中に、教師もまた重要な一員である。教師は、幼児が幼稚園にきている間の生活を共にし、一年間を共に過ごすリーダーである。教師は、幼児を客観的にみているだけではすまない。幼児の間の生活感情の中に入りこみ、その喜びと楽しみ、その不満を刻々に感じながら共に生活している。しかしその生活は衣食住の煩いから原

則的に解放された生活である。教師に期待されていることは、幼児の心身の成長に専心当ることである。子どもと共にある生活の中で、教師はその子どもおよび子どもたちに、何を与えることが必要であるかをよく考えて工夫しなければならない。そこで幼児の生活感情の中に入りながら、客観的にこれを観察し、客観的理解をもってゆかなければならない。教師は自ら行動する前に、あるいはその基礎として、幼児の動きを観察して理解することがたいせつなのである。個人の動き、グループの動きをよく把握しておくことが次の段階への踏み石となる。教師は幼稚園生活の中で非常に重要な存在である。しかし、活動するのは幼児である。それぞれの幼児のもっているエネルギーを十分に生かさなければならぬ。教師のエネルギーよりもっと大きなエネルギーを幼児はもっている。これをどのように活用するかというところに、保育技術の最大の問題がある。

### 研究の重要性

幼稚園の現場は、とかく、過去のしきたりに左右されやすい。先輩のやってきたことと違うことをやることは悪いことのように思う。あるいは、自分が今までやってきた経験に固執して、それにのみ頼ろうとする。幼児は適応性が大きいから、先生のやり方に一応適応して無事についてきてくれる。しかし、

もう一歩つっこんでみると、先生のやり方によって、子どもの活動のしかたや、意気込みはまるで違ったものになる。教師は常にそのやり方を工夫し、子どもの反応を観察して、子どもの行動が一步一歩向上するようにしなければならぬ。幼児をあずかる教師にとっては、何々主義というようなものは不要である。先入観や偏見をもって出発するのではなくて、その子どもたちにとって最善のことにするように決意して出発するものでなくてはならぬ。そこでもっとも必要なことは、研究的態度ということである。そのやり方がよいか否かをきめるものは、幼児の行動自身である。幼児がより満足して生活し、能力を十分に發揮して活動するならば、幼児はよりよく発達するのである。

現場研究はどのようにしてすすめるか。

それでは現場における研究はどのようにしてすすめたらよいのであろうか。それはとくにきまったやり方があるわけではなく、保育者自身が問題を感じて、それに応じて発見してゆけばよいのである。しかし、それではわかりにくいであらうから、以下にいくつか考えるきっかけを指摘しておこう。

まず第一に、先生が手を下す前によく見ることである。教育や保育は、子どもの実態の上に立たなければならぬから、まず、よく観察することなしには、先に進まないのである。その

ときに、保育者の側にいろいろの考えが湧いてくる。それにはだいたい二通りある。一つは、適応していない子どもをどのようにして適応させるかという消極的側面、もう一つは、すでに適応しているものについて、さらにもっと建設的な活動に発展させるにはどうしたらよいかという積極的側面である。たとえば、いつまでもグループの中に入れない子どもがある。それをどうしたらよいだろうかというのは前者である。自分で積極的に遊ぶ子どもについて、自分の主張をするだけではなくて他の子どもの意見をいれるようになるのにはどうしたらよいか、あるいはまた、他の子どもと協力して遊ぶ経験をすすめるのにはどうしたらよいかというようなことは後者の問題である。

感じた問題に応じて、どのような材料を出してみようか、どのような助言を与えたらよいだろうかというような構想が出てくるであらう。そうしたら、ある材料を与えてみる。あるいは、ある態度で子どもに接近してみる。そうして、子どもはどのようにそれに応ずるかと観察してみる。このように、観察して↓試みて↓反応を観察して↓試みて、とくりかえしてゆくのが現場の研究の経過である。試みて、ということの内容には、いろいろの内容がふくまれる。どのような試みをしたらいいかということをきめるのには、その問題に対する洞察が必要なので、その洞察を養うためには、巾の広い教養や、専門的

知識も必要である。また、何よりも、そのことを一生けんめいに考え、いつも頭においていることが必要である。

かなり以前の研究であるが、あるクラスでの単元の展開の経過を分析したことがある。それは、動物のぬいぐるみの材料を使用して協力遊びを發展させるという課題であった。最初、動物のぬいぐるみを出してみても、どのように子どもたちがそれにとりくみ、どのように遊ぶかを観察する期間をとった。約二週間、子どもたちはそれを用いていろいろの遊びを展開した。そしてだいたいの新しい遊びが出そろい、二週間後にはこの材料を用いた遊びは下火になってきた。(観察)そこで、この遊びを協力遊びに發展させるために、異った材料を加えることを試みた。それも既製品を加えるのではなくて、材料を作るところから始めようと考えて、先生が木工をやりはじめてみる。(試み)そして子どもの反応を観察しながらやる。子どもは木工にとびついて、ひこうきや舟をつくる。一通り思いついたものをつくると、先生は何を作っているのかに関心をもつ。すでに動物遊びの経験があるから、ぬいぐるみの動物と関連させて、いろいろのものができてくる。棚ができる、動物小屋ができ、木の動物もできる。(観察)このような活動がまた二週間くらいいつく。この遊びの規模をもっとひろげて、クラス全体で動物園をつくり、それぞれの子どものグループが動物の役割をとって、

動物園ごっこにまで發展させるのにはどうしたらよいかを考える。そこでとった方法の一つは、動物に関するリズムと、動物に関する描画を何回もいれてみる。(試み)いろいろな動物の表現が出てくる。(観察)これはごっこ遊び發展のための基礎技術として役立つ。それから、動物園の見学は実物経験として、動物遊びをリアルなものにするであろう。(試み)結果は、今までにみられないこまかい表現があらわれる。(観察)そして約一月半の後には、クラスの部屋の中に常時動物小屋がつくられ、数人の子どもが一つの動物小屋を担当して、それぞれのアイディアをもってそれが完成された。そしてそれぞれのグループ間にも交渉ができ、動物園を開園してお客様を招くなど非常に活発な協力遊びに展開したのである。(詳細は、津守真・堀合文子協力遊びの發展と誘導、幼児の教育 五十三巻十号、昭和二十九年参照)これはほぼ一学期の大半を費した大きな単元で、その活動の豊富さと、子どもたちの意気込みを私は忘れることができない。その後、何回か類似の大規模な単元に遭遇して、その壮観に目をみはったことがあるが、私自身、保育のことを学んだのは、この動物遊びを見たことによるところが大きいような気がするので、あえて引用したのである。

前に述べた現場研究の定式、観察↓試み↓観察↓試みの連鎖は、もちろんこの例のような大きな単元の試みにのみ通

用するのではない。もっとも小さな試みにも同様に適用されるのである。

最近、ある区の研究会で報告された事例研究の中にこういう例がある。それは無口な子がはじめて『おはよう』とあいさつをしたときである。その前日に家庭訪問をしたので急に親密感を増した結果らしい。そこで『きのう、B子ちゃんのおうちへいったわね、新宿住宅なのね』と言ってやる。するとB子は嬉しそうに、にこにこして、その日は何回も教師のそばにくる。これなどは、どこにでもあるありふれた場面であろう。しかし、分析すれば、前述の定式があてはまる。ある試みの後に、この子をはじめて先生にあいさつをする。(観察)それに対して、子どもが親密感をもった経験―家庭訪問したこと―について教師がひとこと口にしてやる。(試み)そして子どもがうれしそうににこにこして、何回もそばにくる。(観察)この現場研究はここから出発して、次第に口をきくようになる経過を追ったものであるが、毎日の指導が観察↓試みの連続ともいえる。このような例は、日常の保育の中に数限りなく見つけることができるであろう。

現場のできごとは、いろいろの要素がくみ合わさって成り立っていて、決して一つや二つの要素からできているのではない。だから、たとえ、ある試みをして、かならずそのために

結果がこうなったのだということを断言することはむしろかしい。また、その試みというの、実験室の実験のように厳密に一つの条件をとり出すのではない。偶然のできごとが思わぬ効果を上げてくれることもある。現場の研究では、一般的な結論を導き出すことが目的ではない。その点で、研究室の研究とは性格を異にするのである。現場研究の目的は、その子どもが、またそのクラスが向上することである。そのためにいろいろの知識を動員し、観察して、仮説を立て、試みるのである。

現場の教育は発展性をもたなければならない。発達しつつある子どもとともに、指導法も発展してゆかなければならない。ある主義や、あるやり方に固執したときには、発展性を失ってしまう。しかし、やり方が新奇であればよいというのではない。子どもの実態にそくして必然的に生れてくるやり方が発展性のあるやり方である。子どもの状態と無関係に、突然、あることがらを子どもに与えたのでは混乱してしまう。子どもの行動にそくして、一步一步、子どもを観察しながら、試みをすすめてゆくときに、子どもが向上し、指導法も向上し、発展してゆくのである。

\* \* \*





# あそびしゃじ

清水エミ子

じしゃくの先にまばたきしない眼がすいついてしまったのではないかと思われるほど真剣に、じしゃくに釘がすいつくの、はずしはつけはずしはつけているN男。

全身の力をかわい親指と人さし指に集めてじしゃくをもちほそいくぎをすいあげて喜ぶH夫。やっと三本つながってさがったじしゃくの釘をとなりの子にみせようと声をかけたとたんとれてしまつてチュッと舌うちしてくやしがるA吉。釘の山の中にじしゃくをうずめていちにいのさんで取り出し、じしゃくにくつついた釘をくらべあっているS子。

子どもたちはひとりですべて数人で、あまり変化のない静的なじしゃくあそびのくりかえしをあきずに長時間続けている。そしてそれが単なるくり返しではなく、一回一回前と違った発見をしながらやりなおしている。そしてそのひとりひとりがいかにもその子らしい遊び方をする子と、そうでない子があることを強く感じさせられた。そしてその感情の表現にも、大きな差のある事に気がついた。

そこで私の幼稚園の他のクラスとさらに他の幼稚園（文京区）でも試みてもらい、具体的活動で比較してみても感情教育の教材としてのじしゃくあそびをたしかめてみた。

①全員にU字型じしゃく（20円の品）を与え、その遊び方と持続時間をみた（くぎとじしゃくだけ）。

②「もういい」と遊びをやめてじしゃくをもって来た時セムクリ

ップ（他のもの）を与えてその遊び方をみる。

①一斉に扱うのは一回だけにとどめ、その後は室内に常時そなえつけ、自由に遊べるようにしておき、その遊びの発展と感情表現をみた。

## △Ⅰ 一年保育児に与えた時の持続時間の違い▽

私の園では一年保育児を生活年令別に三学級に分けており、文京区の学級は四月から三月までいりまじっている学級である。

①文京区の学級 十六分～二十分（男児）、十二分～十八分（女児）  
男児は二十分あそんだ子が一番多く女児は十三分の子が一番多い。クリップは、人もほしがらず、使わなかった。

### ◎足立区関屋幼稚園

四月～八月生れの子 一番はじめにやめると言った子が二十五分だった。が次の活動の都合で全員三十分でやめさせてしまった。遊ばせておけばまだまだ続いたと思われる。

九月～十一月生れの子 一番最初にやめた子が二十五分、一番長くつづいた子が五十分で、三十分～四十分の間の子が大部分であった。クリップは使わなかった。

十一月～三月生れの子（私の学級） 一番はじめにやめたのが十八分（文京区とにている）。一番遅くまで続いたのが四十五分、男児（二十五分～三十五分の子が一番多い）。クリップを与えてから遊んだのが三十分～十五分。

・持続時間だけみても二学期の終り頃の一年保育児は変化の少ない静的活動のくりかえしを楽しんでいることがわかる。男女差が余りみられなかった事はみのがしてはならないと思われる。

## △Ⅱ 一斉活動での具体的あそび方とその発展▽

私の学級の遊び方を中心に眺めてみよう。

①なんのしかけもないのにどうしてくつつくのかねえ。

一番早くもうやめたともってきたK・S男（どんな活動でもくいつきは早いがきつであきっぽい子）じしゃくにすいつくことが不思議でじしゃくにかねのほうをつけてはじしゃくをながめまわしていた。釘の先にもう一本釘が偶然くつついたのをとび上ってびっくりし大声で「先生、ただの釘にもまた釘がつくんだよ、なんにもしかけがないけど」とさわいでいた。この子のあそび方はあまり変化はなくじしゃくの引力にまかせ偶然の吸いつきを楽しんでいた。

(f)じしゃくを机の上にのせ釘に近づけてくつつける。

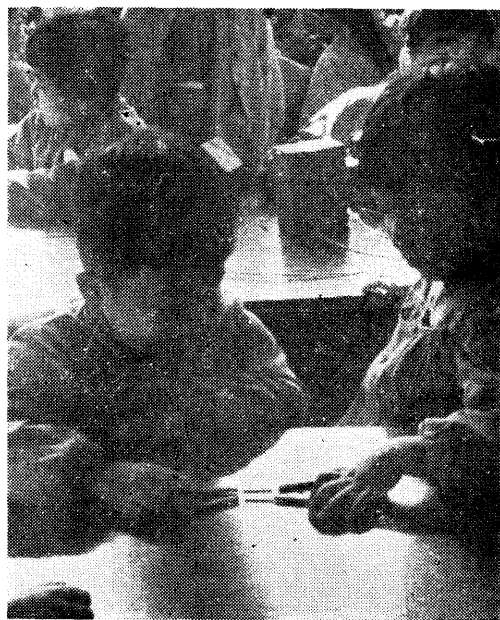
(g)釘を机の上におきじしゃくを上から近づける。

(h)すいついたじしゃくと釘を机の上で動かしてあそぶ。

・じしゃくの中にゆびをいれまわし「ぶーんひこうき」とぐるぐるまわす。

となりの子と並べて動かし「自動車競走ね」と机の上を行ったり来たりさせていた。

②ぼくはじめてやったよ、マホウってこんなのいうんじゃないの、



全身の力を指先に集め、人が違ったようにじしゃくのすいつきをながめたしかめ、そしておどろきの声をあげているT夫（私の学級では空想を楽しみながら子どもらしい理くつを言う子であり、独想にはいりやすく集団からはずれることがしばしばある子）。

・じしゃくを持ち、一、二回釘をすいつけて私をよび、「先生、地球の引力ってこういうのかもしいれないよ、きつと」と言って指先に力を入れて釘をもちじしゃくをすいつかせては、はずすときのていこうを何回もたしかめていた。

「スーパーマンはこういう力が体中にはいつているんだねきつと」



といいながらくぎを二本吸いつかせたりつなげたりして「はい、まほうです」と自分のハンケチを釘とじしゃくにかぶせて釘をすいつかせては楽しんでた。何か変ったことがあると「アハッ」と声をたてて喜んだりびっくりしたりしていた。

③鉄をかためるときにべたつかないのりをまぜてかためたのがじしゃくなんですよ。のりのはいつてるとこだけ白いじゃない。

釘を何本もつなげようとじしゃくをねかせたり立てたりしてくり返し、とうとう四本の釘をつなげ大よろこびのU・K雄（わがままで自分勝手に集団からはずれやすい。勝気でけんかなどどんなにや

られても涙をださないでがんばる)。

・机の上においた釘をまず10本ほど独占、「今ぼくがこれだけつけてみせるからね」とすずしい顔で釘をつけはじめたが思うようにつかないで口の中でフツフツ言い、となりの女児のじしゃくと自分のをひたたくつとりかえ、またつけていた。そして「鉄をかためる時にべたつかない」と言っていた。

・じしゃくを手を持ち、くぎをたてにつなげる。

二本目をつなぐとき横にねてしまうかはずれてしまうので、だめになってしまう。

・机の上のじしゃくをねかせ、くぎをつなげ、そつとおこしてみる。

しかし一本だけがついてきてあとはみんなはずれてしまう。

これを何回かやりなおし「ちえっだめだー」と舌うちしていたが、そのうちくぎを少しかさねてくつつけることを考えだしやってみた。二本ずつついた。ブランブランゆれるのをみて「アハッ」と声をだして笑い「やめようと思った時くつついたよ、ブランブラになるのをやめればいいよ」と今度は横と



たてを交互にやってみていた。しかしこれは釘の先がほそくなっているためよくつかない。そこでセロテープを持ち出して来てとなりの子に笑われてやめてしまった。テレかくしも手つだつてじしゃくを机の上をすべらせ「汽車だもの」と急に動かした拍子に、はずれたのこりの釘が丁字型にくつついたのをみて「ひこうきにしよう」といってとなりや前の男の



子たちのじしゃくにつけたり、かきまわしたりした。「ぶーんジェット機」というと、同じ机の男の子たちもまねて思い思いにひこうきを作って戦争ごっこがはじまった。そのうちU・K雄が「はじめにくつついてる釘がとれたひこうきは故障でまけなのね」とみんながむしやらにぶつけるひこうきから、釘がとれないように、手の動かし方をかげんしたり釘のすいつけ方を真けんに吟味したりしてあそんでいた(七分〇九分づいていた)。いつものU・K雄だったら自分からぬけていってしまうのに遊びをリードしていたのはおどろいた。

④僕の指一本とじしゃくの力と力くらべだ。

U・K雄たちの遊びをみていてなんの気なしに人さし指をつっこんでじしゃくをまわしていたら、じしゃくから釘がはずれてポタリとおちたのをみていたN・Y男(いつでも人のまねしかできない子。考えようともせず人のあとにくつついている子)。

・「じしゃくったら鉄のくせに僕の指一本にまけているの」といいながら四、五回くり返していた。

・くぎのつけ方によってなかなかおちない事を発見、いきおいよくまわしていた。O・U男が「なにやってるの」と声をかけると、今までなら何も答えずスッとどこかへいってしまっていたN・Y男が「空とぶ円盤」といった。私は思わず近よって「円ばん、すごいきおいね」というと「うんO・Uちゃん一しょにやる?」といって二人で何回も何回もくり返し、しまいに机の上に白ぼくで地図をか

き、その上をとばしていた。その顔はいままでみたこともない笑顔だったし全身を小おどりさせてあそんでいた。

⑤じしゃくっていうことをきかない。

あまり器用でない指先で一生懸命二本の釘をくつつけていたK・Y子（何でもやりたいけれど思うようにできず、何回かやり直し、しまいに放棄してしまふねばりのない子）。

・二本の釘とじしゃくに顔をくつつけて何かしているの近よってみるとすいついた釘を横にしたりたてにしたりとったりつけたりしている。私が近づいたのに気づくと「先生じしゃくも釘もいうことをきかないの」という。私が「どうして？」ときくと「こつちむけにしようとするどビシャッとくつついてとろうと思うとはずれないもの」という。このへんで「やめた」というかと思っていると、

・「先生くぎで顔ができた。笑った顔だよ。そこからこれはおこりかおねえー」

そして鉄ぼうだよ ゆうらんせんだよと言ってきたのにはおどろいた。この遊びは四月〜八月生れの学級にもみられたがひげ、ばってん、手でもってゆらゆらさせ空中ブランコと名づけていた。

⑥ちようちようができるわよ、ほら。

組にしようかと誘われて近よせたじしゃくが、ビシャッとくつついたので大よろこびのY・K枝（何をやるにも皆とテンボが一つお

くれている子、そして遅れすぎると泣いてごまかし放棄してしまいがちな子）。

・誘われてうれしそうに手でじしゃくを動かした瞬間、じしゃくが友だちのじしゃくにビシャッとくつついたので「ついちゃった」と喜び、力をいれてはなし、また友だちのに近よせていた。Y

・K枝が自分の方から先に行動をおこしていたのにはおどろいた。友だちが「釘より力が強くつくね」と声をかけると「ちようちようができたわよ、ほら」と机の上を動かしていた。友だちがもっていた釘をじしゃくの間にいれるのを見て自分のもいれた。「大きいちようちよだね」という。

・それを三回くり返し今度は釘でひげをつけ「本ものになってきたね」とよろこんでいた。

この時Y・K枝は、友だちのテンボにあわすことを通りすぎて彼女がほんのわずかではあるがリードしていたのにはおどろいた。この遊びも四月〜八月生れの学級にもみられたが、汽車にして机の上をはしらせていた。

⑦どつちがいつぱいくつした。

釘の山の中にじしゃくをうめてはそつとひきだし、釘のかずをかぞえていた。回を重ねるたびに目を輝かせ真剣に山の中からじしゃくを取り出していたT・K子（いつもがさつだが一つのことに熱中すると創意ある遊びをする）。

・まず、じしゃくで次々に釘をくつつけてははずしていたが、しま

いにじしゃくを机の上におき上から釘をたくさんおとし、じしゃくをかくしてしまい、それからそっと取り出し釘がいくつついているか、かぞえていた。

六、七回やっているうちにじしゃくにねらっておとすようになった。

・それをみていた他の幼児も釘をつかんで来てやりはじめた。がT・K子にはなかなかかわない。「T・Kちゃんうまいね」といわれ、それがとてもうれしかったらしく「どっちがいっぱいくつuitた？」と歌のようにいって喜んでいた。そして「考えておとすんだよ。ふといのとか、ほそいのとか、ちいさいのとかって順番にやるんだよ」と何回もくり返してやりながら自分なりに学んだ方法を友だちに教えていた。この時の目の輝きと全身に力をいれた真剣さには驚いた。


⑧ そんならこういうのやる。

くぎの山をはじから一本ずつすいつけてくずしていったT・K子とくぎの山の中にじしゃくをうめるあそびをしていたH・T男はまけつづけのくやしきから、何とかちがう方法でなければT・K子をまかせないと考え、苦しまぎれにしんけんに発見した山くずし遊びなのだ。

(H・T男は落着きがなく、いまここにいたと思うと向うにいるし、これをやっていると思うともう違うことをしていて、何ひとつまとまって遊ぶことができない子。)

・「一個ずつしかとっちゃいけないんだよ」と山のすその方からそっとすいつけていたT・H男はそれをみて、じしゃくを近づけたが二本三本一度についてきてしまい「あーあ」といいながらやり直している。H・T男は「ほらね、こっちは僕のが上手だね」とうれしそうに自信を取り戻し「あのね、そっとそっとやるんだよ」といい「山のでっぺんだってそっとやればこれだけつくんだよ」ととくいそうにやっていた。H・T男がこんなに長時間一か所にいたことは珍らしい。その上真剣に一つの遊びをしたことに驚いた。

⑨ くぎつてあまったれでひとりでもんなかあるけなくてすぐよっかつちゃう

じしゃくに顔をくつつけるようにして一本のくぎをおいかけている。じしゃくの中央に釘をおいては、じしゃくをそっと動かしている。A・A子(ややむらのある子だが一つの事に熱中する子で、あり一人でこつこつたしかめる子)。一本の釘とじしゃくで何かごちよごちよやっていた。近寄るとじしゃくの中央に釘をおき何とかくつつけずに動かしたいという。

「先生やってみてよ」というので私がやってみたが動いてこない。ちょっと右か左にじしゃくががたよると、ピシャッとくつついてしまい、くぎは動かすことはできなかった。それをみて「うごかないね、釘つてあまったれだね。釘つてすぐよっかつてくついちやうね」といいながらそれでも何回もくり返しやっていた。そして今度は、「机の下じゃ動かない」机の上にくぎをのせ机の下で

じしゃくを動かしてみても「やっぱりだめだ、くぎってだだっ子だね」といい、じしゃくをもって近くの友だちのをながめに歩いていた。

⑩じしゃくって電波だよ。

何気なくじしゃくを持った手を釘に近よせてそっとあげた時、机の上においた釘が立ちあがってボトンと落ちたのを見て、驚きと発見のよろこびで近くの友だちに説明してあるいたT・O夫。

(新しい活動に対してはおくびようだが、何回か一人でこつこつくり返したためし、自信がつくとそれを土台にいろいろな遊び方を考えてあそびはじめる子。)

・じしゃくと四〇五本の釘でついたりとなったりしていた。

・そして釘のつき方の変化を眺めて楽しんでた。

・はずした釘を机の上におき、じしゃくを持った手を上にあげながら、ひょっと、釘をみるとじしゃくから一cmぐらいはなれて五寸釘が立ちあがっていた。はっと息をのんだとたん「ぼとん」と釘は机の上に倒れてしまった。瞬間自分の目をうたがっていたようだったが、さっそくじしゃくを釘に近づけてひっぱりあげていた。はじめはじしゃくが高すぎて立たず、近よせすぎてびしゃつとすいついてしまったりしていたが、

・七、八回やるうちに少しもちあがってたおれたり、すいついたりするようになった。そして、そのたびに「あれ」「ウーン」とくやしそうな声を立てていたが目は釘とじしゃくにすいついていた。

「ほんの少しだけはならせればいいんだけど手がいうことかないんだな」と、ひとり言をいいながら左手で右手を押えてじしゃくを近づけていた。

・そしてついに釘をじしゃくでくるくるうごかすことに成功した。

そしてその時、彼の口から「じしゃくって電波だよ」と思わずとび出した。しかし、だれもそれに反応しなかった。すると「ぼくのいいよ」と近くの友だちの目の前でやってみせた。

このあそびは次々にまねされたが根気のある子だけが成功し、あきやすくねばりのない子は「ぼくのじしゃくには電波はないよ」とやめていった。



そして、成功した子どもだけで釘立て競争がはじめられた。このあそびは九月と十一月生れの学級では、三本を一ぺんに立て、じしゃくをはなすと、しばらく立っているのをふしぎがっていた。

⑪もちあげようと思ったらハイオリンになった。

釘立てをやってみようと一生懸命くり返していたO・W介が失敗から発見したあそび。

(何をやるのもおそく無口で、一学期間は集団からはみだしがちで何をやるのもびりだった。運動神経がにぶい。二学期になり同じ傾向の友だちが二、三名でき、活動もめだたなくなってきたが、仕事

に對してねばりのない子。)

・T・O夫の釘立てあそびをみて、七く八回まねていた。

私はめずらしいなと思ひながら眺めていた。

・手先があまり器用でないため近づけすぎたり、はなしすぎたりで一回も成功しなかった。そのうち、すいついた釘が片方に斜めについて五ミリ位すべって動いた。

・それをみて前にすわっていた友だちに「もちあげようと思ったらバイオリンになったよ」と鼻さきに出してみせていた。それからじしゃくを胸の上にもちあげて、すいついた釘をななめに動かして「バイオリン、バイオリン」とやっていた。前の友だちが先生O・Wちゃん バイオリンだって、おもしろいね」とまねしていた。

入園以來O・W介自身からのあそびははじめてといつてもよいほどめずらしかった。

このあそびは四月く八月生れの学級でも単独でみられた。そして同じ型のじしゃくあそびを鉄砲・機関銃と名づけてうちあいをしてあそんだが、私の学級では鉄砲類には一人もしなかった。

⑫じしゃくでもボーリングができるね。



じしゃくを机の上におき、その上に釘の頭をつけて釘を立てた。人さし指で左右に動かしていた。そして「ボーリングになるかな」とつぶやいてはいろいろの所に釘を立てていたK・T男。

(末っ子と鼻の悪さが手伝って、一つのあそびを自分でまとめてあ

そべない子。)

・しばらく釘をつけたりはずしたりしてややあきた時、何気なく置いたじしゃくに釘をつけてみて立ったので、うれしくなってまたあそびだした。

・そして近くの友だちにも釘を立てさせ、チリ紙をまるめて机の端から端へころがしてあてていたが、チリ紙ではなかなか倒れないので、友だちが庭から小石を拾ってきてチリ紙に包んでころがして当てる。すると釘が倒れてじしゃくからはなれた。それを見て庭にとんでいき、石を拾って来て紙に包まず石だけで当てる。三回目によつと当って、二本釘が落ちた。とびあがってよろこび、近くにいた女の子に黒板に点数表を作らせて10分ぐらいいもあそんだ。

⑬めい中ごっこ

この時近くでみていた女児、机の上においたじしゃくに上から釘をおとして釘を立てることをやっていた。四く五名の女児が仲間に入り「めい中ごっこね」とはしゃぎながらやっていた。そして、そのうちの一人の女児が「あかい所はめい中してもつかないね」と言っていた。―遊びから科学的発見ができる―

⑭調子いいとよくころがるよ、練習すると、ながくできるよになるよ。

自分の座席にきちんとすわったまま、一本の釘で七く八分あそんでいたが、じしゃくと釘を持って私のところに来て、机の上に釘をおき、じしゃくを近よせて左右にそつと動かした。すると机の上の



釘もじしゃくにつれて動いた。そして「ほらね」と私の顔を見あげたM・N子（5人姉妹の中間子で上と下からやられているため何かにつけてひがみっぽい子。共同で使う教材なども手をださずにいて、あとで「みんなが使ってたしの分なくなつた」と言つて来たり、私に対して自分の要求をはっきり言わず口の中でぐちゃぐちゃ言っている子）

・あそびはじめは二本の釘とじしゃくでつけたりはずしたりしていた。そしてグループの友だちがいろいろ歓声をあげて喜こんだり、発見したりしてあそんでいても、一人グループからはみだしてあそんでいた。私は「またはじまつた」と思つてみていた。しばらくすると釘とじしゃくを持つて来て、釘を動かしてみせてくれた。そのうれしそうな顔にみとれていると他のグループの机の上で釘を動かしながら「調子がいいとよくがるよ、これね、練習するとながーくできるようにするよ」とだれに言うことなく言いながらやっていった。それをみていた他のグループの子どもたちも一せいにやってはじめた。なかなかうまくゆかず、すいついてしまつて「だめだ、M・N子ちゃんもう一回やってみない」とアンコールされてまたしてもにつこりして「このぐらいがいいのよ、ねえー」と言つて素直にやってみせ、「先生練習すればできるよね」と大きな声で大分はなれた私に声をかけた。それからM・N子は二、三か所机をまわつてやつてみせて、室の中をスキップしたり、うたを口ずさんだりしていた。

#### ⑮ ぼくらは松戸競輪だよ。

M・N子に釘ころがしを教えてもらった男児名が机の端に並んで「よいいどん」と競争しながら「競輪なのね、ぼくらは松戸の競輪だよ」と言いながら、七、八分やつていた。そのうちに五、六名がかわるがわる交代して競争していた。

このあそびは四、八月生れの学級でも同じ方法であそんだが自動車競争と名づけ、おまわりさんや交通信号が書かれてあそばされていた。

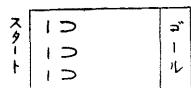
#### ⑯ 画用紙のうしろからでもくつついて動くね。

あそびはじめて十分後に、「画用紙使つてもいい」と言つてきたH・K雄。「どうぞ」と言うと「この上でやつてみるんだよ」と言つて席にもどつた。

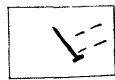
（あそびは雑だが長時間あそびがつづく子、一人でも多人数でもどちらでも適当にあそびを發展させる子。）

・机にもどり画用紙に釘をのせ下からじしゃくを当てようとするが紙が坂になつて釘がころがって落ちてしまう。五、六回根気強くり返していたが、うまくゆかないので、

・向かいがわの子に「もつてて」と頼み、紙をもちあげてもらつて、釘の下にじしゃくを当てて釘を動かした。「画用紙のうらからでもくつついて動くね」とうれしそう。そして二人で交代で何回かやった。そのうち向かいがわの子の画用紙を持っていた手がすべつ



て、紙が下にひらりとおりた。その時、くぎはじしゃくにびつちりついていたため落ちなかった。するとH・K雄は「ちょうちよ」と言って画用紙をひらひらさせた、向かいの子にもやるようにすすめ、二人で室中「ちょうちよ」をうたいながらまわっていた。



・つぎに席について向かいの子が「もうやめた」と言ったのでしばらくボツンとすわっていたが、そのうち紙の四すみを折り、箱のふたのようにして、一人でかみの裏から釘を動かしはじめた。「ひとりでできた」と私にみせた。

・その時、私のそばにいたA・M男が「H・K雄ちゃん相撲やろうぜ」と言って自分の釘を画用紙の中にほうり込み、下からじしゃくをつけて動かした。するとH・K雄は「そんなら土俵かかなきゃ」と土俵をかけた。それから五く六分すもうあそびをやっていた、そしてH・K雄とA・M男は室の中をあっちこっちして挑戦者をつつてすもうしていた。

このあそびは四く八月生れの学級では十三分後に紙をほしがり、紙の隅に釘をのせ、片手で紙をもちあげ、坂をつくり、片すみのじしゃくに釘をすいつかせていた。

九く十一月生れの学級でも紙をつかってあそび、紙の下からくつつくのをふしぎがり、「じしゃくの力がくつついているんだよ」と言っていた。この学級はすもうあそびが一番流行したらしい。私の学級では、もういいと言って来た子にクリップをみせて「これがあ

るけどあそびない」ときそってみた。クリップではただ長くつなげるあそびしかおこなわれなかった。

以上が私の園の三学級の一齐に行なったじしゃくあそびの流れと子どものようすです。私の学級（十一く三月生れまでの学級）ではまたやりたいと言うので常時じしゃくを二十こほど保育室においてみて自由あそびの時間に使えるようにした。

### Ⅲ 自由あそびの時のじしゃくあそびの発展

#### ① 円盤あそび

朝登園するなり、室にかかっているじしゃくをみつけ「まるくなつたはりがねちょうだい」とH・T男が言ってきた。私がクリップの箱を渡すと「五つちょうだい」と言って、机の上のせ上からすいあげていた。そして「円ばんだよ」といいながらあそんでいた。



#### ② すもうやろう。

H・T男のあそびをみていたA・M男が「そうだ」と言って画用紙を出し、四すみを折り、かごをつくりクリップを入れ、下から動かしてみて、クリップの中を立てて近くにいたH・Y雄の手をひっぱって「すもうやろう」ときそいクリップの中をおこして立てたものを渡して「こうやるの」とやり方を教え、すもうあそびをやっていた。登園して来た男児七く八名がまねして、組を作っすすもうあそびをやっていた。



しかし、大半は釘をつけたりとったり  
することを一人で楽しんでいた

③お池を作ろうよ、それでアヒル泳かす  
のよ。

クリップのすもうを見ていたH・N子、  
近くにいたA・A子に「お池作ろうよ。

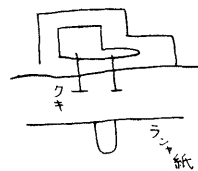
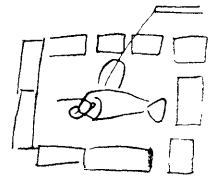
それでアヒル泳がすのよ」と言ってクリ

ップを六く七こ取りに来た。A・A子は画用紙に水色のクレヨンで  
ぬって池をつくった。その上にクリップの中をおこしたのをのせ二  
人で下からじしゃくを当てて動かしていた。それをみてまたA・N  
男が「アヒルの泳ぎ競争しようよ」とA・A子のグループにきて競  
争をはじめていた。

④魚つり作ったんだよ。

A・A子のアヒルを少しはなれた所でみていたA・O子が画用紙  
に何かかいてクリップをもらいにやって来  
て、「これに糊つけてもいい」ときいた。

「どうぞ」と言うとう座席にもどり何やらやっ  
ていたが、しばらくして「魚つり作ったんだ  
よ、ほら釣れるでしょ」とみせに来た。大小  
四・五匹作ってかわるがわる吸いつけてもち  
あげていた。これを見て、U・K雄が棒をほ  
しがつたので割りばしを与えると、ひももく



れと言う。そしてひもの先にじしゃくをつけてA・O子のところへ  
行き、「やらして」と頼んで魚を釣った。これをみて四、五名の男児  
もつり竿を作った。積木で池を作り積木の外から釣っていた。その  
うちA・O子は園庭に行ってしまった。魚も十匹にふえていた。

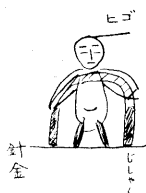
このあそびのあった次の日からこの魚釣りにヒントを得たあそび  
が多くみられた。トンホ取り、セミ取り、バツタ取り、チョウチョ  
取りがはじまった。

次に現れたのが自動車、二枚合せに切った自動車の間にくぎをは  
さみ、紙の下から動かそうとしていたが、頭が重く、なかなか立た  
ずに苦労していた。

⑤機械人形を作る。

自動車が立たないのでK・H男が「先生じしゃくを紙の中に入れ  
てもいい、あとで出すから」と言ってきた。「どうぞ」と言ううと、  
「機械人形作るよ」と言って二枚合せにした紙で人間を作り、間  
にじしゃくをはさんでセロテープで留めた。そして机の上に釘を並

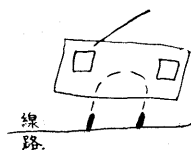
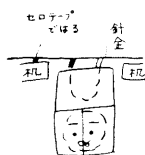
べてそこに立てようとした。が釘が動いてしまうのですぐころがる。そこで釘をセロテープで机の上にとめた。そして人間を立てたがセロテープの上はすいつきが悪くやはり倒れる。私に「セメグインちようだい」と言うので「何にするの」と聞くと「釘をくつつけるの」と言う。そこで説明を聞いてから針金を出してみた。針金を机にはりつけて人間を立てていた。しばらくは立つがすぐころぶ。そ



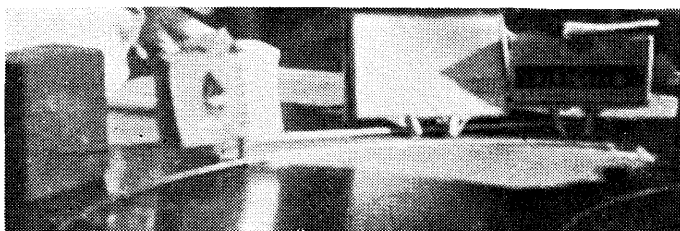
こで人間の頭にヒゴ竹をくつつけてその先をもって針金の上を歩かせていた。

#### ⑥ ケーブルカー

針金を出したためにI・K夫はビスの空箱の中にじしゃくを入れ、ケーブルカーを作って机と机に針金をさしわたしてそこにつるした。じ



しゃくの足の出し方でよく吸いついたり、すぐはずれたりするので大分根気強くやりなおしていた。これを見ていたU・O雄やH・A



男たちは、机の上に針金の線路をつくり（切りかえや駅や車庫や信号）、空箱で乗りものをつくって汽車ごっこをしていた。汽車、電車、トローリーが作られ、そのわきを人間も歩かせていた。針金とじしゃくの引き合う力の抵抗を手でたしかめながら動かしていた。おもちゃの自動車のうしろにひもでじしゃくをつないで釘をまいてすいつけていた子や室の中の所々の金具にすいつけてつく物とつかないものをたしかめたりしていたが、砂場には一人も持っていないかった。

以上が一斉に行なったじしゃくあそびと自由あそびで行なったあそびのあらましですが、秋から冬にかけてのじしゃくあそびを経験してみても、子どもたちからいろいろな問題を投げかけられているのを強く強く感じたのです。

・まず第一に私たちのもっている保育概念の不確かさです。今までのじしゃくあそびを反省してみると、①魚釣りのためのじしゃくであり、②金にすいついたものとかかないものをたしかめさせるためのものにすぎなかったようです。そして、秋のおわりから冬のはじめに適した自然の活動をしたと決めてまんぞくしてしまっていたのではないのでしょうか。

前にあげた事例でもわかるように、子どもたちは一回の経験をもとに自分であそびを広げていくし、あそびがこれで終りということなしに発展しているこのことでも、今までのじしゃくあそび

ははっきり反省させられました。

・個人でできる静的あそびのくり返しを驚くほど楽しんでいる。そしてそのくり返しがグループあそびに発展していくことを知らされたのです。私たちは幼児に与える童話はくり返しのある単純なものがよいなど知っていても、それは童話にしか活用していいのではないのでしょうか。他の活動にもこんなに必要だったことを目の前にみせられくり返しのつかない空洞に冷汗を感じます

・入園以来いろいろな形で問題のある子たちにいろいろな活動を通して、適切な指導をしようと一人ひとり真剣にみつめていたつもりでも、まだまだ確かめきれないものがあつたことを個々の子どもについて感じさせられたのです。

この子にこんな感情がこんな時にあらわれるのだな、と恥ずかしいながら二期の終りごろになって気付かされた子たち、そして今までの観察とちがわず私を勇気づけてくれた子どもなど、それぞれ感情の表現に大きな差のあることを知らされたのです。

・活動が雑であきっぽいK・S男のように動的な活動にいくつきやすい子でも静的あそびのくり返しをたのしみ、味わってくれている（何のしかけもないのになんでつくのかね）。事例①。

・わがままで自分勝手な集団からはずれやすいU・K雄（事例③）の全身の力を指先にあつめて口を輝かせ、じしゃくと釘をみつめ途中でほうり出さずに根気よくくり返し成功のよろこびを味い、「アハッ」という声と笑いによるこびの感情をすなおに表わし、

それからいくつかのあそびに發展させている（鉄をかためる時にべたつかない糊を入れてかためたのか）。

・何でもやりたいけれど思うようにできず、放棄してしまうねばりのないK・Y子（事例⑤）。じしゃくに顔をくっつけてくり返していたが、くり返しの効果がその失敗から一つの発見をさせ、偶然のよろこびを味わい、くり返しによるねばり強さを経験することができた（じしゃくについていうこときかない）。

みんなのテンポよりおくられていたK・Y枝が、友だちのテンポに合すことはもちろん、ほんの短い時間でもあそびをリードする経験ができた（ちょうちよができるわよ、ほら）。事例⑥。

・失敗の経験が劣等感としてのこらず、かえってはげましになり真剣に自分からあそびを作り出そうとする努力に変ったH・T男（事例⑧）のように、落着かない子が長時間一か所で真剣にくり返しを確かめながらあそべた。この子をみていて、私はじしゃくのようなくり返しのきくものであそびはあそび方と興味が一致した時に、人が変ったように落着き、發展することを知らされた。そして私たちが今までいかに教材を画的に与えていたかを反省させられた（そんならこういうのやれる）（持ち上げようと思ったらバイオリンになった）。

・くり返しによる偶然からの発見でグループの活動に積極的に入っていたK・T男、うれしさをかくしきれず、全身で動きだした（じしゃくでもボーリングできるね）。事例⑫。

・くり返しの効果でひねくれの気持ちがすなおな積極性とあそびのよろこびを味わうことができたM・N子（調子いいとよく転るよ）。事例⑭。

・自分でゆっくりくり返ししながら確かめた活動は、あそびながら科学的発見をするし、思いがけない發展を子どもたちの中から引き出してくれることをいやというほど、自由あそびのじしゃくあそびで知らされたのです。

アヒル・すもう・人間・乗物こっこなどのどの、あそび方をみても、子どもたちの中にある力強いエネルギーを感じるので。そして経験のくり返しによる成功・失敗の体験の必要性を感じ、失敗を積極的な活動に変えていく訓練をしなくてはいけないと反省させられました。そしてこれからも、子どもたちに子ども自身のやりなおしの可能な教材を選び、失敗のチャンスを多く与えて、失敗を積極的なものに変化させていかれる力をつけていこうと強く心に言いかけましたのです。たとえばあきっぱい子はやりなおしのくり返しによって頑張ることのよろこびを感じて頑張れる子にしていきたいものです。

このような、感情の教育に必要な教材を、子どもとともにひとつもつという確かめていきたいと思っています。

訂正 4月号43頁「幼稚園は一代か」の執筆者は、青柳義智代、44頁上段13行目の清水福郎は清水福市の誤りにつき訂正します。

# 四十 年の 歩 み



浅野 寿美子

「四〇年の歩み」を書くように言われて、しみじみと指折り数えてみました。大正十三年に女子師範学校を卒業し、一年間小学校に勤務、大正十四年から母校に初めてできた付属幼稚園に保母兼訓導として赴任し、昭和十六年に市立第三幼稚園の園長となつてから現在までですから、もう三十八年にもなります。

無我夢中にこの道に精進してきました私は、こんなに長い年月がいつのまに過ぎたのかと我ながら驚いたりあきれたりしています。先生になりたいと思つたわけでもなく、ふつとしたきつかけで師範学校に入學し、卒業のときも義務年限の三年が自分につとまるかしらと不安がついていた私ですか

ら、よくまあここまで勤務することができたと思うのです。年月にはさまざまなできごと——うれしかったこと、苦しかったこと、悲しかったことなど——が数多くありましたが、今ではみんな楽しい思い出となつて私の心を暖めてくれます。幼稚園にまゐりました初めの一年は、幼児教育について専門の指導をうけていませんのでとても心配でしたが、しだいに興味がでてまいりましたので本腰をすえて勉強しました。ですから結婚後は家事に煩わされぬため、私の養母の主人の母や姉に家にきてもらい、私は幼稚園のことに専念できるようにしました。こうして私のすべてが幼稚園、幼稚園にあけくれする生活がつづきました

が、その間まず第一に健康であつたこと、教師としての責任を全うしたこと、誠意をもって努力したことなど、一貫した精進が私をここまで引きあげてくれたのだと信じます。お話ししたいことがあまりたくさんあつて、何から話したらよいのかわからなくなりまして、私の幼稚園生活を大きく三つにわけて、おもなことのだけのべてみることにします

第一期は、大正十四年から昭和十六年四月までです。

これは私の温室時代とも申しますか、先生や先輩に守られて思うぞんぶん勉強したり、遊んだりして楽しかった期間です。二年保育、二組幼児数五〇名という幼稚園で、しかもえらばれたこともばかりですから、一人ひとりのこどもにしみ通る家庭的なふん囲気でした。ことに母校ですから気兼ねもなく、のびのびとした気持で研究ができました。教生の指導もありますし講習会や研究会の開催などもありますので勉強せずにはいられません。当時お茶の水で倉橋惣

三先生の講習会が毎年ありましたので、楽しみにして夏休みには上京しました。園舎は保育室2、遊戯室1、職員室1でしたが設備は不十分でした。そこで設備の整備をするため、つぎつぎといろいろなものをつくったり、改善したりしていきました。そのおもなものは、運動具のいろいろ、池、鉄橋、山、トンネル、砂場、便所の改善（浄化槽をつくり水洗式にする）、手洗場、給食の実施に伴う調理場、その他備品などたくさんありますが、こうして環境をととのえることに力をそそぎました。また当時は視聴覚教育の研究たけなわの頃でしたから、付属小学校の先生たちに刺激されて、私も観察の資料となるスライドや8ミリのフィルム作製など日曜も返上して数多くつくりました。この時代に一つ忘れることのできないことは、県から愛知県保育会の研究会に助成金が初めて出されたことです。昭和七年だと思いますが、小学校校長さんから県から補助金が貰えるといわれて、何度お願いにも出てもらってもだめでした。校長

さんには叱られるし、泣けてくるし、困ったあげく、知人に紹介してもらって、夜分郡部の収入役さんの自宅をたずねて近くまで帰られるのをまって必死に陳情、やっと金五十円也の助成金を貰いました。しかし、これが県からの補助金の初めでした。

第二期は昭和十六年、名古屋市立第三幼稚園の園長として赴任してから昭和二十年終戦までです。

温室育ちの私が三十五才で初めて園長として社会へ出たのですから、「石の上にも三年」という諺のように、三年間じつくり勉強しようという決心をしました。八学級という大きな幼稚園で幼児数も二八〇名位でしたからたいへんでした。まもなく大東亜戦争というかつて経験したことのない事態となり、いかにして子どもを守るかということに専念しなくてはならなくなりました。さらに付設戦時保育所ができて幼稚園は一時休園するという状態になりました。そして昭和二十年五月十四日何一つ残らず戦災によって焼失してしまい、職員や小使

さんは疎開したり、いなかへ帰ったりして私一人残されて終戦を迎えました。

第三期は、昭和二十一年から現在までです。

復興建設時代、幼稚園振興のための努力時代とも申しましょうか。「国家の再建は幼児教育に全力をかける他に道はない。これが私に与えられた使命だから命をかけて努力しよう」と、当時私は街に遊んでいることものをながめて必死の覚悟をしました。そしてそのときから私のひたむきな精進がはじまりました。以来十七年間自分の幼稚園のこと、市内の幼稚園のこと、県下の幼稚園のこと、東東地区、全国といろいろのしごとをしてまいり幼稚園教育の振興と向上にむかって私なりの努力をつづけてきました。つぎにその一、二についてのべてみることにします。

昭和二十一年のはじめ、とにかく幼稚園を開くことが第一と場所をさがして走り廻り、ようやく駅近くで焼け残った広井国民学校の教室を借りることができてここに幼



稚園を再開しました。設備はもちろん、費用も全くありませんので借りてまわってようやく集め、こどもは町内会長さんに依頼して回覧板をまわして募集しました。昭和二十二年には父兄の要望にこたえてようやく江西小学校の教室を借りて市立第三幼稚園の分園をつくりましたが、しだいに希望者が多くなり、本園、分園合せて一組という大世帯となってしまいました。昭和二十四年園舎建設を目ざして復興後援会を組織し、二五年には一部ではありますが園舎の建築ができました。

その後モデル幼稚園候補校として文部省から指定をうけ、また全国幼稚園施設協議会（創立当時は全国モデル幼稚園協議会）を結成して毎年研究大会を開き研究の成果を発表し合ったり、園舎の増築や改善をして、教育の効果を高めるためにはどのような施設設備をとのえたらよいかという研究をつづけてまいりました。また昭和二五年に第一次建築の竣工式、同二七年に第二次建築の竣工式を行いました。なお、この

間に園舎建築ができるまでの父母や市当局その他の方々の協力や職員努力をまとめて「あゆみ一号」を、小学校の不備な設備での保育や新しい園舎での指導の結果をまとめた「保育の実験一号」を刊行しました。

また昭和二七年の竣工式の翌日第一回全国モデル幼稚園協議会研究会を当園で開催し、昭和三〇年に創立四〇年、復興一〇年の記念式をあげました。この記念事業として鉄筋建ての書庫、休養室、衛生室を建設する一方、「あゆみ二号」（創立当時から記録のまとめ）「保育の実験二号」を刊行し、全国に呼びかけて記念研究会を開催して公開保育をいたしました。昭和三六年第一回全国幼稚園施設研究大会が名古屋市にもたれ、当園も分科会場になりましたが、その前日に創立四五年を祝う集いを行ない、幼稚園が無一物から現在にいたるまで、ご指導、援助して下さいました方々と語り合う会をもちました。そして記念として「あゆみ三号」と、三年保育を中心として「友たちと遊ぶこどもの姿」（フレール館発行）

の刊行をしました。

そしてこの間、常に後輩をそだてることに心がけ、研究会、講習会、視察はもとよりできるだけ研究の機会をつくり、たえず勉強させるように努力してきました。

なお、私事です。昭和二五年文化の日に名古屋市教育委員会から優良教員として表彰をうけ、昭和三六年にニュートリーで開かれた第一〇回世界教育者会議に幼稚園代表として出席し、さらに、海外諸国を視察して大いに視野をひろめることかてきました。また昭和三七年十一月七日には思いがけなく文部大臣より教育功労者として表彰をいたたく光栄に浴し感激しており、ま

す 永い間未熟な私を指導して激励してくださった多くの方々に心から感謝を申し上げて、今後一層、研さんに、幼稚園教育の振興にまい進したいと存じます。

（名古屋市立第三幼稚園）

\* \* \*

## 今年の雪と幼児



武 鎧 秀 子

大雪小雪ゆきこんこ、といつでも冬になると降雪を期待し、よろこび迎える子どもたちであるが、今年は未曾有の豪雪となりそのもつ威力をおしみなく振るったのである。今年は元旦早々まっ白い雪におおわれ、それ以来根雪となり、つもる一方だった。

一月十日三学期開始と共に、子どもたちはかるたやゲームあそびの話より雪あそびのことに花がさき、雪のうたやリズム表現

などでしばし楽しくあそんだ。しかし一週間もするうちに、積雪量は多くなるばかり、時折り猛吹雪をまじえ、子どもたちの通園をなやました。竜巻のような吹雪、一面灰色となって吹りしきる雪、前に歩いた人の足あともすぐうめつくされる有様で、危険も予想され、十六日、十七日と臨時休園とした。あけて十八日も雪はようしやくなく降り続く。そろそろ屋根の雪おろしがはじまる。登園退園の際の注意をなし、地域別に担

当の先生が引率する。毎日の天気予報は大  
雪注意報、大雪警報の連続、二十三日にはど  
うしてもこれ以上保育をつづけることがで  
きず、当分無期休園とする。園舎もこの間三  
回にわたり屋根雪の除雪。どの教室もまっ  
くら、背丈よりも高い雪をおろすにもな  
かなかだけれど、落した雪のしまつに困り、た  
だだ自然の猛威のなすままに、処置の方  
法すらなかった。人々は大きな冷蔵庫の中  
に毎日を過した。こうなると雪に対する子  
どもたちの夢もすっかり消えうせる。外に  
も出られず、そうかと言ってお正月の延長  
のような気分にもなれず、毎日を雪と戦う  
家族の様子をみて、幼児なりにできる手伝  
いや、みんなに迷惑をかけないように、い  
つもの約束を思い出して実行してくれたこ  
とと思う。また中には雪のために楽しい幼  
稚園に行くことができぬとて外を眺め、早  
く降りやんでくれることを祈っていた子も  
あっただろう。とにかく、二米一三という  
積雪量のため鉄筋の小学校の講堂がつぶれ  
たとか、いろいろな惨害をテレビやラジオ  
で視聴する。幼児なりに今回の雪をどう  
思ったか、雪による楽しいあそびよりも日

々耳にあるいは目で見る災害に胸をいためたことだろう。毎日の天気予報に子どもながらもしっかり聞き入ったことと思う。むつかしい気象の専門語にも次第に関心が高まる。そもそも豪雪ということについて気象庁のはなしを記してみると、

「大雪というのは長い期間降りつづく雪のことで、期間は短いが多量の降雪のある場合は強雪と言うことになっている。大雪でもあり強雪でもあった場合を豪雪と言う」。北陸はこうしたありがたくないお客様を迎えたわけである。交通機関は全部ストップ。不安と不便を克服する一方、緊急災害対策本部の指令のもとに、待望の自衛隊の方たちの涙ぐましい活躍と市民全部の協力、併せて天候の回復と相まってようやく人心に安心感を与え、勇気をわかせ、二月四日前後より各学校は授業を開始した。本園は通園区域など考慮して二月十日から本格的に保育を再開したが、まだ一部の子どもたちは乗物の都合でお休みする者もあった。ガラス窓は全部雪におおわれ、空はお部屋からさえぎられ、まっくらな園内を見て、「雪っておそろしいね」と二十日あま

りのお休みの間に体験した話が出る。また一方、まけずぎらいで元気な子どもは「もっと降っても平気だぞ、飛行機で空から葉をまいて消せばいいんだよ」「そうね、そうすることができるようになると、みんなも心配しないでいいわね」。科学する芽生えがちよっぴり伺えた。或る女の子はお砂糖なら、氷菓子ならうれしいと話し合っていた。なだれについても余りよく理解されなかっただろうに、いろいろな災害のおこるのを知るたびに経験は広まっていた

困る雪 恐ろしい雪、うれしい雪など……子どもなりに感じとったことであろう。特に健康面、衛生面などは、進んで気づいて実行するようになった。テレビ視聴中、雪あそびなど雪に関したものは、見ている子どもも目も一段と緊張し、一つひとつの場面をくいい入るように眺めている。とにかく、子どもたちを含めて北陸の人々は大雪の恐ろしさということをいやと言う程経験したのである。教師は保育後、いまだに窓より高い雪の除雪に余念がない。しかしお日様の輝きに、一日一日とその量は減少してゆく。深い雪国のこの地にも、しのびよる春

の訪れが感じられる。もう少し消えたら、子どもたちを雪の上に出して思いきりかけっこさせたり、制作の意欲を満足させてやりたいなど、楽しい思い出となるような経験をさせてゆきたいと思う。

(福井 尾上幼稚園)

\* \* \*

### 日本保育学会第16回大会

日時 五月十八日(土)～十九日(日)

会場 香川県高松市

市民会館 県庁ホール

内容 (イ)研究発表

(ロ)シンポジウム

「就学前の家庭教育のあり方」

(ウ)その他 課題研究・公開講演など

参加資格 正会員 準会員(当日受付)

連絡先 香川県高松市幸町一二一

香川大学学芸学部心理学教室内

日本保育学会第十六回大会準備委員会

# 島根県の幼児教育

舟 木 哲 朗

幼児教育の状況を一括して述べることは、複雑で困難である。幼稚園と保育所とをいっしょに論ずることはむずかしいし、このほかに、いわゆる「無認可施設」も存在する。しかし、これらをバラバラに述べたのでは、幼児教育の真の状況がわからないので、やや複雑になるが、これらを一括し、島根県の幼児教育の現状・当面している諸問題・研究会や研究組織などについてまとめることにする。

## へ 現 状

幼稚園数とその幼児数ならびに保育所数とその幼児数は下段表のとおりである。

この数字を全国総計と比較してみると、幼稚園においては、設置数でも幼児数でも約百分の一にあたり、普及率は全国平均程度であ

区 分	設 置 数			幼 児 数
	国 立	公 立	私 立	
幼 稚 園	一	六四	一四	七、〇三〇
保 育 所	—	一二四	七九	一二、二四五

る（島根県の人口が全国総人口の約百分の一であるから）。ただし、国公立と私立との設置数の比は、全国総数ではほぼ一对二であるが、島根県では逆に、ほぼ五対一となっている。

保育所においては、設置数で約五十分の一、幼児数で約六十分の一にあたり、普及率は、全国平均の一・六倍ないし一・七倍（推計）となる。なお、公立と私立との設置数の比は、全国総計のほぼ五対四と似ている。

このほか、統計にあがらないものとして、いわゆる無認可施設がある。これらの施設には、幼稚園の性格のもの（「幼児学級」と呼ばれるものが多い）と保育所の性格のものがある。

次に、幼稚園ならびに保育所の分布状態を見ると、幼稚園は、東部（出雲部）に集中して西（石見部）に少ない。また、隠岐島には設置されていない（近く設置される見込みであるが）。なお、幼稚園は都市部に多く、農村部に少ない。

これに対して保育所は、ほとんど全県的に分布している。一般に都市部では、同地域に幼稚園と保育所の両方が設けられて

いて、それぞれ本来の目的を果たしている。しかし、農村部では幼稚園が保育所かいずれか一方しか設置されていないところが多い。このため、幼稚園が保育所の代用の役をしているところや、逆に、保育所が幼稚園の代用の役をしているところもある。

### へ当面している問題

#### 一、無認可施設の問題

無認可施設も、そのほとんどは良心的なもので、幼児教育に貢献している。けれども、その教育をさらに充実に向上させるためには、正規の施設とする必要がある。また、職員の身分や給与を安定させたり、幼児に対して学校安全会による災害の保証をしたりすることも必要であるから、これらの施設が早急に認可を受けることが望ましい。しかし、これらの施設の多くは設置基準に合致しないし、きりとて、それを県や県教育委員会の強硬な処置によって整理することも困難な状況にある。これらの施設に対してどのような行政指導を加えるべきかは今後の重要な課題であろう。

#### 二、幼稚園・保育所増設の問題

前にも述べたように、幼稚園が保育所の代用をつとめたり、逆に、保育所が幼稚園の代用をつとめたりしている。これは、両方ともじゅうぶんに設置されていないために起こった現象である。だから、「代用」でなくてすむように、両方とも必要な数だけ設置されなければならない。

また、代用できる地域はまだよいとしても、幼稚園も保育所もなく、無認可施設さえもない地域がある。これらの地域の幼児は、幼児教育の恩恵に浴することができない。

さらに、幼稚園の設置されているところでは、幼稚園の入園希望者はともかく入園できるが、保育所では、定員の十倍以上の志願者があつて困っているところもある。

このような状況にあるので、無認可施設の問題とともに、増設の問題も急を要するわけであるが、早急には解決されそうもない。

#### 三、職員定数と給与の問題

幼稚園も保育所も、現在の設置基準では職員定数がじゅうぶんでない。そのうえ、現状では基準スレスレかもしくは基準を割っているところがある。このために、職員のオーバーワークが問題になったり、不慮の事態に対処できないことがあつたりして困っている。

給与については、幼稚園では浜田市の公立幼稚園が義務教育学校と同一（教育職給料表適用）で、松江市の公立幼稚園がこれに準じている（教育職給料表適用）。しかし、それ以外の市町村では、行政職給料表によつていて不利である（出雲市では浜田市や松江市に近い金額になっているが他の市町村ではかなり低い）。

保育所でも給与は一般に低く、改善が望まれている。なお、幼稚園・保育所ともに、一般に私立は公立より低い。

#### 四、職員の補充の問題

幼稚園についてみると、教員養成が行なわれるのは島根大学（教育学部小学四年課程）のみである。しかし、島根大学の卒業生で幼稚園に就職する者は、毎年二、三人程度しかない。このため、県外の短期大学保育科などの卒業者を採用することになるが、教諭の不足に困っている。このような現状を打開するため、幼稚園教員養成機関の早急な設置が望まれている。

保育所については、県立保育専門学院において保育の養成が行なわれているが、それでもなお不足している。

結局、職員のじゅうぶんな補充ができなければ、前に述べた増設の問題にもかかわりが出てくるので、適切な方策が必要になるう。

## 五、職員の資質向上の問題

職員の資格が設置基準に合致しない幼稚園がかなりある。幼稚園においては、学級数の三分の二以上の教諭を置かなければならないことになるが、小規模幼稚園に教諭が少ないことが問題になっている。

県教育委員会では、教職員の資質向上のため、近年は臨時（助教諭）免許状は出さないことにしている。しかし、すでに助教諭として勤務中の者がたくさんあるので、これらの教員が早急に助教諭免許状を得られるような配慮をしなければならない。

なお、教育を行なう者は免許状ではなくて「人」である。免許状はあっても、それでじゅうぶんだというわけにいかない。これ

は幼稚園にも保育所にも共通して言えることであるが、教育の振興は結局職員の資質向上によって期待できるものである。この意味で、研修の場をより多く準備する必要があるう。

## 六、混合保育の問題

近年幼稚園教育の普及により、二年保育や三年保育が増加しつつあるが、学級編制上混合保育を行なわざるを得ないことが多くなった。また、保育所においては、その大半が混合保育を行なっている。

混合保育の利点を強調する人があるが、実際には、現状では害の方が多く出ている。混合保育が避けられない問題であるとすれば、その害を克服する研究が必要であるが、今のところ、見るべき研究も行なわれていない。これは、今後の重要な研究課題であろう。

## 七、指導計画の問題

従来、指導計画は五才児本位にできており、四才以上のものは、いわゆる「水増しプラン」に終わっている。これは「さかだち」した教育であり、ムリやムタが多い。このような現状に堪がみて、指導計画の徹底的な再検討が必要であろう。

## へ 研究組織・研究会

幼稚園では、国・公・私立を一本にまとめた島根県幼稚園教育研究会がある（国公立だけの組織や私立だけの組織はない）。この会

八つの支部から成っており、かなり強力な活動をしている。おもな活動は次のとおりである。

### ○幼稚園教育研究会

毎年一回（会期二日）行ない、保育公開・研究発表討議（分科会）・講演などを内容としている。講師には、大学教授のほか県教育庁の指導主事六～七人を動員し、県内幼稚園教員の大半が参加する。

### ○幼児教育振興大会

各支部（八か所）で毎年、回行ない、支部内の幼稚園教員および保護者が集まる。内容は講演と研究討議が中心で、講師には大学教授、指導主事などをあてている。

### ○幼稚園教育指導者講座伝達講習会

文部省主催、幼稚園教育指導者講座参加者を講師とし、自力で伝達講習会を開いている。

このほか、市町村単位の幼稚園教育研究会があつて、それぞれ毎学期（地域によっては毎月）研究会を開催している。また、小学校との合同研究会もしばしば行なわれている。

なお、県教育委員会でも幼児教育に力を入れており、毎年幼年期教育研究会（二日間）を開催するほか、研究指定園（四園）を設けている。また、免許法認定講習は小・中学校教員と共通の数単位のほか、幼稚園教員のみを対象とするものを四単位開設している。その他、各園独自の研究発表会も数多く行なわれている。

保育所では、島根県保育連盟の組織があり、次のような活動を行なっている。

### ○研究発表大会

毎年一回、各郡市単位の研究発表大会を行ない、それに続いて県大会を開いている。郡市単位のものから県大会までを加えると、ほとんど県下の全保育が動員されることになり、盛会である。

### ○夏期保育大学

毎年一回二会場（各二日）で開催され、保育の現職教育の場となつている。講師には広く中央地方の適任者を選んで、毎年特徴のある内容を盛っている。

### ○保育現任訓練講習会

毎年県下数会場で開催し、現職教育を行なっている。

このほか、郡市単位の保育研究会があり、それぞれに研究会や講習会を行なっている。

以上、概要だけ述べたが、幼稚園は公立が圧倒的に多く、国・公・私立の総数は多くないが研究組織や意欲においては決して悪くない。地元の島根大学や県教育委員会が幼児教育に力を入れていることもうれしい。昭和三十八年度は松江市で全国国公立幼稚園長大会が開催されるので、多数来会されるよう期待している。

保育所は数的にかなり多い（これでもまだ不足であるが）。そして、乳児の数の多いことが島根の保育所の特徴だと聞いている。これは喜ばしいことだと思う。

（島根県教育庁指導主事）

# 第十二回 幼稚園教育実際指導研究会

教育内容の研究——「社会」を中心として

主催 お茶の水女子大学附属幼稚園

幼児教育研究会

協賛 お茶の水女子大学

教育研究室・児童研究室  
附属小学校・中学校・高等学校

今年もまた本研究会を開くことになりましたが、毎年のご厚情を深く感謝申しあげます。

幼稚園教育要領の改訂もまじかとなり「社会」についての指導書もすでに編集中であります。本会としましては、他の五領域については昨年までに一応研究を終えたことになっていますが、「社会」については、昨年、問題点を見きわめる程度に触れただけであります。それで、本年は、この分野に関係する諸問題を取り上げていっそうの探究を重ねたいと思います。また、恒例により、本園の保育全般にわたる実際指導を公開して、皆様のご批評をえたいと願っております。

本年も、多数の皆様の御参会を心からお待ち申しあげています。  
なお「幼児の教育」六月号を、本テーマに基づく特集としました。

日 時 昭和三十八年六月七（金）八（土）九（日）の三日間  
会 場 お茶の水女子大学講堂  
講 師

お茶の水女子大学教授	波多野完治
お茶の水女子大学教授	勝部真長
お茶の水女子大学助教授	津守真
お茶の水女子大学教授	坂元彦太郎
附属幼稚園長	



實際指導

お茶の水女子大学附属幼稚園職員一同

会 員  
申 込 期 限  
申 込 場 所  
宿 泊

幼稚園・保育園・小学校の教育関係者及び一般希望者  
三〇〇円（研究要項代を含む。当日お払い下さい）  
五月二十五日まではがきでお申込み下さい。  
東京都文京区大塚町三五 お茶の水女子大学附属幼稚園 幼児教育研究会  
ご希望の方は五月二十日までに申込み下さい。二食付八〇〇円（サービス料一割も含む）ぐらいにてお世話いたします。

日 程 表

6月9日 (日)	6月8日 (土)	6月7日 (金)	
		受 付	9.00
実 際 指 導	実 際 指 導	開 会 の あいさつ	9.30
協 議 会		実 際 指 導	10.00
講 演			11.00
閉 会 の あいさつ		協 議 会	
	昼 食	昼 食	12.00
	協 議 会	講	13.00
	講 演	演	14.00
	全 体 質 疑	講	15.00
		演	16.00

依田新 波多野完治 監修  
鈴木清 波多野勤子

### 「児童心理学の進歩」

一九六二年版について

津 守 真

まず第一に、これは非常に高度の學術書であるということを言っておかなければならない。しかも、児童心理学の専門家はかならず持っていなければならない書物である。幼児教育は児童心理学とは切りはなせない関係にあるから、保育学、幼児教育を専攻する者にとっては必須の書物と言える。ただし、実際の保育的関心からは、やや縁遠く、また非常に高度の知識を要するから、一般の実務家には不向きかもしれない。

これは、一九五九年から一九六〇年にかけて、日本の研究者によって行なわれた、児童心理学の研究の総括的な紹介である。アメリカで出版されている書物に、アニュアル・レビュー・オブ・サイコロチーというのがあって、毎年、心理学の領域でなされた研究を、いくつかの分野にわけて、その概略を紹介している。最近のように、学問研究が多くの研究者により活発に行なわれるようになると、その成果を消化することはない。しかも毎年にとつても容易なことではない。しかも毎年の積み重ねを整理してゆかなければ研究の無駄も多くなる。このアニュアル・レビュー

は、アメリカでは博士課程の学生が勉強する虎の巻になっている。日本でも、学問的な研究の量は外国に比して劣っていないし、質的にもかえって優れたものも多くある。それなのにこのような総括的な紹介書がないのは残念だと思つていたところ、波多野先生などの肝いりで、児童心理学の分野で、それが実現したことは実にうれしいことである。一つのすぐれた研究が出ることも重要であるけれども、こうした完璧な文献紹介集が出ることは、児童心理学の進歩に貢献することはきわめて大きいと思う。

幼児教育、幼児保育の分野は、従来、とかく程度が低いものと見られがちであつた。しかし、この分野も学問的に発展してゆかなければならない。それには学問的基礎が必要である。その意味で、本書のような書物は、保育学、幼児教育学を發展させるのに重要な役割を果たすと言いたいのである。

今後、毎年、新しい年の研究が紹介されてゆき、第二巻、三巻の発行も間近いとき、つづいてゆくことを願っている。はじめに述べたように、幼児保育学を専攻する方にはぜひおすめしたいし、実務家の中にも、この程度の書物を読みなす人がふえてくれれば、幼児保育の分野も、きつと向上すると思う。

(金子書房 一、二〇〇円)

### 幼児の教育 第六十二巻 第五号

五月号 ◎ 定価六〇円

昭和三十八年四月二十五日 印刷

昭和三十八年五月 一日 発行

東京都文京区大塚町三五

お茶の水女子大学付属幼稚園内

編集兼 津 守 真  
発行者

東京都文京区大塚町三五

お茶の水女子大学付属幼稚園内

発行所 日本幼稚園協会

東京都板橋区志村町五

印刷所 凸版印刷株式会社

東京都千代田区神田小川町三ノ一

発売所 株式会社 フレーベル館

振替口座東京一九六四〇番

◎本誌御購読についての御注文は発売所フレイベル館にお願いいたします。

一九六二年度の保育界の動向と保育学研究の  
全般的状況を、ひとつにまとめた書。

保育学会の大会研究報告と六二年度の保育資  
料を収録した書。

一九六二年版

## 保育学年報

日本保育学会編

### 目次

- 第一部 日本保育学会第十五回大会研究報告
- 第二部 保育関係文献目録
- 第三部 保育関係の組織と動き
- 第四部 特集

B5判 一七六頁

定価 六〇〇円 千一〇〇円

発売 フレーベル館

新刊

フレーベル館の音楽書

幼稚園教育要領に準拠した幼児のための楽しい曲集

## みんなで たのしく 〈曲集〉

鑑賞教材・歌唱教材・リズム教材な  
ど全24曲を収載、系統的曲集 250円

幼稚園教育要領に準拠したレコードによる音楽リズム指導の実例

## みんなで たのしく 〈指導書〉

同名のキング保育レコードより25曲  
を抜粋、多角な解説を試みた 250円

幼児のための

## 7つの オペレッタ

藤田妙子著

日常のリズム遊びから自然にオペレ  
ッタへ発展できる楽しい曲集 340円



# キンダーブック

6月号予告

み ち

別 冊

## キンダーブック 物語絵本

(季 刊)

春 の 号

ぶーふーうーのきしゃごっこ

文・飯 沢 匡  
製作・シバプロダクション



別丁ペアレンツコーナーつき

B5判 20頁 50円

株式会社印刷



都会に通じる高速道路。先生と遠足にいった峠のみち。お友だちとなかよく通う園へのみち。そんなみちを、ひとつの科学として観察する6月号キンダーブック。

A4判 16頁 付録つき  
60円

東京都千代田区神田小川町 3-1

フレール館

振替口座 東京 19640 番 電話 東京 (291) 7781~5